

# 極楽・龍宮・錬金術 ―インド諸文献の脈絡で―

水野善文

## I. はじめに

本稿執筆のそもそもの契機は、本務校で分担しているリレー講義に「ユートピア」というお題が与えられたことにあるが、それより少し前、やはり本務校の学園祭恒例催事であるヒンディー語劇を、たまたま同年度に開催された国際シンポジウムの余興としても学生たちが上演したのが『浦島太郎』の翻案脚本化したものだったことも、龍宮へ導かれる伏線となっていた。一齣の授業以外にも、学外での講演、研究会などで度々このテーマでの報告機会が与えられ、その都度徐々にバージョンアップしたものの、完結にはほど遠い。だが、雲散霧消するのをおそれ、ひとまず文章にしてまとめておくことにした。文章化を後押ししてくださった諸師がいらしたことも大変ありがたく、御礼申し上げたい。

10年近くインド文学史の共同研究を手がけてきて、言語横断的伝承に強い関心を抱いていることが、今回の手法に反映している。個々の文献を、それら各々の文献学的成果をふまえつつ照合して、いわばトランス・テクスチャルな観察をほどこして見えてくる文化伝承の命脈がある。ここで紹介するのは、その一例であり、その意味でインド文学史研究プロジェクトの成果の一つでもある。

人間が希求した理想の世界、究極の存在をめぐって、インド古典はどのように語っているか、耳を傾けていってみよう。

## II. 極楽の描写

インドの諸思想においては宇宙観・世界観についても多様である [定方

2011] が、天界が神の国であったのに対して、人間にとっての理想郷として描かれたもののひとつに「極楽」という仏国土がある。膨大な仏典のなかでは、浄土経典類以外にも、般若経類、法華経類、華嚴経類等々に極楽の描写と類似の表現が見られるとのこと [藤田 1970:474-486] であるが、ここでは、主に『阿弥陀経』から要点を抽出して、和訳 [中村他 1964:下78-81, 90-93] サンスクリット版相当箇所 [藤田 2007:360-367] 漢訳相当箇所 [藤田 2011:84-87] を並べて提示しておこう。サンスクリットと意味的にパラレルではない漢訳部分を ( ) に括って示すことにする。

『阿弥陀経』

- ・ ・ 無量寿と名づける如来 ・ ・ が現に今住んでいて法を説いている。 ・ ・  
 tatrāmitāyur nāma tathāgato 'rhan ...tiṣṭhati...dharmam ca deśayati /  
 ・ ・ 號阿弥陀、今現在説法 ・ ・
- ・ ・ 生ける者どもの身体の苦しみも心の苦しみもない。 ・ ・  
 nāsti sattvānām kaya-duḥkham na citta-duḥkham...  
 ・ ・ 其國衆生、無有衆苦、但受諸樂、 ・ ・

---

1) 『マハー・バーラタ (Mahā-bhārata)』における楽園ウッタラ・クル (Uttara-kuru) の伝承を受けるものとして『大樓炭経』(長阿含) にみるウツタンオツ世界の描写の紹介もある。 [岩本 1965: 106-109] [岩本 1978:58-60] [Hopkins:186] ウッタラ・クルは、諸プラーナ文献にみられるヒンドゥーの世界観において、最北に位置し如意樹 (kalpa-vṛkṣa-) が生える楽園とされ [定方 2011:56]、諸説ある極楽の起源説のうちインド内部に起源をもとめる一つの有力な候補とされている [藤田 2007:372]。『アイタレーヤ・ブラーフマナ (Aitareya- Brāhmaṇa)』 (8,14&23) には神々の楽園としてでてくるが、『ラーマヤナ』 (第4巻 : Kiṣkiṇḍā-kāṇḍa) では、善行を修めた人びと及び、ガンダルヴァ、キンナラ、シッタ、ナーガ、ヴィディヤータラ (いずれも半神半人) の住む所として極楽同様の描写が見られる。 [中村了昭:IV,228-230] 詳しくは [Bhattacharya] を参照。

また、『華嚴経』に観音菩薩の住処として説かれる補陀落山も南方海上にある一つのユートピアとして表象され、本邦では中世期、熊野那智・室戸・足摺などから観音信者が小舟で大海に乗り出す、いわゆる補陀落渡海という狂信的な信仰もあった [根井]。(井上靖が短編小説『補陀落渡海記』(講談社、2000) に描いている。) その補陀落も、きわめて清浄で、緑にとみ、湖沼があり、金剛石の座があつて、荘嚴な描写があるという。 [神野:10-14]

・七重の石垣、七重のターラ樹<sup>2)</sup>の並木や鈴をつけた網に飾られ、金・銀・青玉・水晶の4種の宝石をめぐらし・

...saptabhir vedikābhiḥ saptabhis tāla-panktibhiḥ kiṅkiṇī-jālais ca samalamḥkṛtā samantato 'nupatikṣiptā citrā darśanīyā caturṇām ratnānām / tad yathā suvarṇasya rūpyasya vaidūryasya sphaṭikasya / ...

・七重欄楯、七重羅網、七重行樹、皆是四寶、周匝圍繞・

・金・銀・青玉・水晶・赤真珠・瑪瑙・琥珀<sup>3)</sup>という七宝からなる蓮池があり、八功德水に満ち、・金の砂子が敷き詰められている。

...sapta-ratna-mayyaḥ puṣkariṇyaḥ / tad yathā suvarṇasya rūpyasya vaidūryasya sphaṭikasya lohita-muktasyāśmagarbhasya musāragalvasya ratnasya / aṣṭāṅgopetavāri-paripūrṇaḥ...suvarṇa-vālukāsamstrtāḥ /

有七寶池、八功德水、充滿其中、池底純以、金沙布地、・亦以金銀瑠璃玻瓈（硨磲）赤珠瑪瑙・

・蓮池の周囲には七宝の木が生い茂り燦然と美しい。

...puṣkariṇīnām samantād ratna-vṛkṣā jātās citrā darśnīyāḥ saptānām ratnānām /

(・・上有樓閣 亦以金銀瑠璃玻瓈硨磲赤珠瑪瑙、而嚴飾之。)

・蓮池には、青、黄、赤、白、様々な色の蓮華<sup>4)</sup>が咲いている。

...tāsu ca puṣkariṇīsu santi padmāni jātāni nīlāni ...pītāni ... lohitāni ...avadātāni..citrāṇi .../

<sup>2)</sup> 椰子の一種で、その葉は筆記用に用いられた、所謂、貝葉である。

<sup>3)</sup> 漢訳では「琥珀(musāragalva-)」の代わりに「硨磲」が挙げられている。

<sup>4)</sup> 後で扱う諸文献では、色の異なる蓮華を utpala-などと固有種名で呼ぶのに対して、ここでは一律 padma-とし、色の名称を挙げている。観念的であることがテキスト成立の立地条件等との絡みで気になるが、その意図するところの可能性として、極楽には様々な色 (varṇa-) があってもいわゆるヴァルナ制のような分け隔てはないということを含意させようとしたからかもしれない。拙論 [水野 2006] 参照。

・ ・ 池中蓮華大如車輪、青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔。 ・ ・

・ ・ 常に天上の樂器が演奏されており、  
...nitya-pravāditāni divyāni turyāni /  
・ ・ 常作天樂 ・ ・

・ ・ 大地は黄金色で美しい。  
...suvarṇa-varṇā ca mahāpṛthivī ramaṇīyā /  
・ ・ 黄金為地 ・ ・

・ ・ 夜、昼三度ずつ、天上のマンダーラヴァの花の雨が降る。  
...triṣṅtvā rātrau triṣṅtvā divasasya puṣpa-varṣaṃ pravarṣati  
divyānāṃ māṇḍara-vapuṣpāṇāṃ /  
・ ・ 晝夜六時、而雨曼陀羅華。 ・ ・

・ ・ 白鳥<sup>5)</sup>や帝釈鳴や孔雀がいて、夜昼三度ずつ集まって合唱する。  
...santi haṃsāḥ krauñcā mayūrās ca / triṣṅtvā rātrau triṣṅtvā  
divasasya saṃnipatyā saṃgītiṃ kuruvanti ...  
・ ・ 彼國常有種種奇妙之鳥。白鵠、孔雀、鸚鵡、(舍利、迦陵頻伽、  
共命之鳥、) 是諸衆鳥、晝夜六時、出和雅音。

・ ・ ターラ樹の並木や鈴をつけた網が風に吹かれて快い音を奏でる。  
...tāsāṃ ca tālapaṅktīnāṃ teṣāṃ ca kiṅkiṇījālānāṃ vāteritānāṃ valgur  
manojñaḥ śabdo niṣcarati..  
・ ・ 微風吹動、諸寶行樹及寶羅網、出微妙音。 ・ ・

---

<sup>5)</sup> サンスクリット文学に見られる白鳥すなわちハンサ鳥 (haṃsa-) については[水野 2013]の注 1) に詳しく紹介してあるので参照されたい。

かの如来は、無量寿とも無量光とも呼ばれる。

...sa tathāgato 'mitāyur nāmocyate / ...sa tathāgato 'mitābho nāmocyate /

・・彼佛光明無量、照十方國無所障礙。是故號阿弥陀。・・彼佛壽命及其人民、無量無邊阿僧祇劫。故號阿弥陀。

以下、『無量寿経』[藤田 2007:355-360]における極楽の描写から、一部のみ拾って補う。

『無量寿経』（初期）康僧鎧訳 [中村他 1963：上 147, 155, 157] など四季がなく寒くもなく暑くもない。

・・亦無四時春秋冬夏、不寒不熱、常和調適。・・

七宝でできた講堂、精舎、宮殿、楼閣がある。

・・又講堂精舎宮殿楼觀、皆七寶莊嚴、自然化成。・・

七宝の鉢器の百味の飲食が自然にある。だが、心に思っただけで満腹になる。

・・若欲食時、七寶盃器、自然有前。・・百味飲食、自然盈滿。・・雖有此食・・意以爲食、自然飽足。

同じく『無量寿経』の後期に属するヴァージョンであるサンスクリット本などには、「衣服、飲食、華香、瓔珞は欲するままに現れる」という表現もある [藤田 2007:356-357] [中村他 1963:上 58]。

### Ⅲ. 地下にある荘嚴な世界の描写

極楽と同様に荘嚴な世界は、インドの場合、しばしば地下にも存在した。ナーガたちの住む世界、いわゆる龍宮として語られることが多いが、時代をおって諸文献における地下、もしくは海底にある理想郷を觀察していこう。網羅的と言えないが、目下のところ収集できたものを整理していく。

### III-1 ヴェーダ文献から

『ジャイミニヤー・ブラーフマナ (*Jaiminīya Brāhmaṇa*)』(1, 42-44)の「ブリグの死界めぐり(地獄遍歴の物語)」[辻 1978:22-27] [定方 2011:30-31]では、恐怖の地獄<sup>6)</sup>のなかに突如楽園が現れる。以下に要約して紹介しよう。

ヴァルナ (*Varuṇa*) 神の子ブリグ (*Bṛghu*) はヴェーダの学習者であり、父より優れ、神々より、また学識ある他のバラモンたちよりも優れていると思いついでいた。ヴァルナは「悟らせよう」と、息子ブリグの生気を奪った。ブリグは呼吸を失い、他界へ赴いた。最初の世界では人間が人間を切り刻んで食べていた。二番目の世界では人間が泣き叫ぶ人間を食べていた。三番目の世界では人間が無言の人間を食べていた。四番目の世界では二人の女が一個の大きな財宝を守っていた。五番目の世界では血の川を色黒く裸の人が棍棒を持って守り、グリタ (液状バター) の川から黄金の人たちが黄金の杯によってあらゆる願望を汲み上げていた。六番目の世界では、青蓮・白蓮の花に満ち、蜜の流れを湛えた5本の川、そのなかに歌舞の声、ヴィーナーの音、アプサラス (水の精) の群れ、芳しき香り、大きな響きがあった。

(*ṣaṣṭhaṃ hājagāma. pañca-nadīḥ puṣkariṇīḥ puṇḍarīkiṇīr madhūdakās svandamānāh. tāsu nṛtta-gītaṃ vīṇāghoṣo'psarasām gaṇās surabhir gandho mahān ghoṣo babhūva.* ) ・ ・ [Raghuvira: 12]

### III-2 仏教文献から

本邦の仏教寺院堂宇内にも普く凶像として祀られる龍 (*nāga*) <sup>7)</sup>は、イン

---

<sup>6)</sup> 地獄を意味する *naraka*-という単語は、『アタルヴァ・ヴェーダ』以降にみられ、「人間の(世界)」という語義どおり、元来は死者の世界を意味したのではなく、魔女や殺人者の住処とされたところだという [岩本 1979:201]。また、岩本先生は、地獄信仰は鉄文化とともにメソポタミアから後期ヴェーダ時代にインドに移入されたと見ている [同 204]。ゴードンによれば、ヴェーダ初期文献における *ayas*-は銅を意味し、ヴェーダ後期になってからの *lohita-ayas*- ('赤い銅' の意) という語が鉄を示すという。インドへの鉄器の到来については [ゴードン:219-266] に詳しい。

<sup>7)</sup> ナーガをめぐる神話・説話についての代表的な文献研究はフォーゲルのもので、こんにちもヒンドゥーの人たちが雨期末期のシュラーワン月白半月5日目に祝う蛇祭り (*nāga-pañcamī*) [Caturvedī] のことや、文学史的にも重要な素材となったベンガルの蛇女神モノシャ信仰にも触れている。[Vogel: 277-280] その *Manasamangal*(モノシャモンゴル) *Kāvya* については、その存在を同僚の丹羽京子先生からうかがっていたが、

ドまで遡ればコブラであり、その神話的住処は地下とされる。仏典に見られる龍の世界、龍宮の様相を見ていくことにする。

### (1) 阿含經典

「ナーガ (nāga) 考」という論文のなかで雲井昭善先生は、極楽の描写と一部平行句をもっている龍宮の描写を、阿含經類から『世記經』(『長阿含經』卷18) 龍鳥品第五(大正藏 1;127 中)、『大樓炭經』卷第三龍鳥品第六(大正藏 1;288 中)、『起世經』卷第四諸龍金翅鳥品第五(大正藏 1;332 中)、『起世因本經』卷五諸龍金翅鳥品第五(大正藏 1;387 中)、の4カ所について紹介している。[雲井: 29-30] いずれもパーリ・アーガマには対応箇所がない[赤沼]のでパーリ語での表現は分からない。漢文で、最初の一例のみ示す。

大海水底有娑竭龍王宮。縱廣八萬由旬。宮牆七重七重欄楯七重羅網七重行樹。  
周匝嚴飾皆七宝成。乃至無數衆鳥相和而鳴。亦復如是。

下線部は、先に見た『阿弥陀經』における極楽の描写と表現自体が一致している。それぞれがテキストとして成立した時間と場所の遠近関係が気になるところだ。

### (2) パーリ・ジャータカ

ジャータカは、先行して一般に流布していただろう多くの説話を翻案して作品化されたものであるから、個々の話の起源は、時代的にさらに遡るはずで、一層原初的な龍の世界を垣間見ることになるだろう。既に前田惠學先生により要領よくまとめられているが[前田]、ここでは個別に梗概を、必要に応じてパーリ語彙も示しながら、挙げていく。

---

[Clark] も要領よく紹介していた。フォーゲルの研究を補うように、ヴェーダ文献、『マハーバータ』、パーリ仏典、『マハーヴァストゥ』等からナーガ信仰を扱ったものに [Cozad] がある。仏典に見られるナーガに関しては [定方 1971] [前田] [宮坂] も参照。かなり古いが、サンチーやアムラヴァティーの仏塔を対象として樹木および蛇信仰をあつかう [Fergasson]、ローカルなナーガ信仰を扱う研究書に [Handa] [Panda] など数々ある。

253 「マニカンタ龍王前生物語」 [ジャ全：III, 175-179]

僧房建立のための寄付を募ったところ、師はその修行僧たちを叱責して語った。兄弟の修行僧のうち、弟のほうがマニカンタという龍王と仲良くなった。龍王はしばしばやって来て四方山話をし、親愛の情から蝮局でもって抱擁し頭に鎌首を載せては帰ったものだった。嫌がる弟は憔悴し身体には醜く黄疸と青筋がでたので、兄に相談すると、龍王にマニ宝を所望しろと助言される。その懇願に応えられないことから、龍王は二度と現われなかったが、弟は一層憔悴した。

七宝に満ちた龍宮(satta-ratana-paripuṇṇa-nāga-bhavane)に住む龍にとっても懇願されることは不快なのだから、まして人間にとってはなおさらである。[Fausbøll :III, 286]

256 「古井戸前生物語」 [ジャ全：III, 186-188]

隊商が旅の途中、涸れ井戸を掘って財宝を得て満足し帰郷した。如来は少欲でなかった過去の例を語る。商人に生まれたボデーイッタの忠告にも拘らず、商人たちは更なる財宝を求めて井戸を掘り進めた。その井戸に住んでいた龍王は怒ってボデーイッタ以外の商人を焼き殺し、彼だけは財宝(鉄(ayo-)、銅(loha-)、錫(tipu-)、鉛(sīsa-)、銀(rajata-)、金(jātarūpa-)、真珠(muttā-)、瑠璃(velūriyā-))ともどもバーナラス<sup>8)</sup>へ帰還させてもらえた。彼は財宝を売って得た金を布施し受戒して、死んだのち天界に生まれた。[Fausbøll: II, 296]

386 「ロバの子前生物語」 [ジャ全：V, 2-7]

女性(元妻)への執着断ち切れない修行者に対して師が語る。地上に食物をとりに来た龍王を子供たちが虐めているところをバーナラスのセーナカ王が助け、龍王はお礼に龍宮から沢山の宝物(bahūni ratnāni)を持参し親交を深めるようになった。龍王は龍女を守護のため王に差し出したが、ある日、龍女は遊園地の池で水蛇と交合していた。王が竹棒で打ち付けると龍女は龍宮に戻って龍王に嘘の報告をする。

---

<sup>8)</sup> 現在バーナラスと通称される地名の、音韻論的変容をふくむ歴史の変遷については、拙論 [水野 1996] を参照されたい。



龍王はセーナカ王に刺客を送るも、真実が判明し、龍王は謝罪の印に、動物の言葉が分かる呪文を授けた。・ ・ [Fausbøll: IV, 275]

506 「ウポーサタを守った龍王前生物語」 [ジャ全： VII, 155-167]

アンガ国とマガダ国の中間にチャンパー川が流れており、その中にチャンパ<sup>ッ</sup>龍王の治める龍宮があった。マガダ王が敗北し後退する際、チャンパー川に入水し自害しようとした。水中で宴を楽しんでいた龍王がマガダ王を迎い入れ、事情を聞いて7日間歓待した。マガダ王は龍王の威力によって、帰還後アンガ国を征服した。それ以降マガダ王は毎年龍王に莫大な供物を進呈した。貧しい家に生まれていたボデー<sup>ッ</sup>が龍王の繁栄にあやかりたいと布施行をおこない戒を守って、龍に再生した。だが、畜生として生まれたことを後悔していると、スマナーという龍の少女によって歌舞音曲で慰められた。だがやはり苦滅を欲する彼はウポーサタ（布薩）の日はそれをおこなうため人間界に赴いたが、バラモン青年の呪文にかかり、蛇芸の道具とさせられた。バー<sup>ラ</sup>ナ<sup>ス</sup>で王に抱えられ一ヶ月たつと、夫の消息を尋ねてきた妻スマナーが王に事情を説明する。王は事情を知って龍王を解放させてあげようと蛇使いバラモンを説得した。解放されて青年の姿となった龍王はバー<sup>ラ</sup>ナ<sup>ス</sup>王に奉仕の約束を申し出ると、その王は龍宮への訪問を思い立つ。

<龍宮の描写>黄金をちりばめた地(suvaṇṇacitakaṃ bhūmiṃ)、瑠璃板が嵌め込まれた(veluriya-phalakathate)黄金の宮殿(sovaṇṇaye pāsāde)。・ ・ 各種の樹木(nānā-rukkhehi)に覆われ、各種の芳香(nānā-gandha-)、・ ・ 天の楽器にあわせて龍の少女が踊る(dibbā turiyā vajjimsu nāga-kaññā ca naccayum)、・ ・ 梅檀の液を塗られた(candana-sāra-litte)黄金の(sovaṇṇamaya-)椅子、・ ・ 美しい服・丸い指・手のひら足の裏に朱をぬり・良い顔色の女たち、ひげの多い魚のいる川、アダーサ鳥・クンタ鳥が鳴く(adāsa-kuntābhirudhā)浅瀬、コンチャ・孔雀・天上の鷺鳥・コーキラ鳥(koñcā mayūrā divyā ca haṃsā kokilā)が飛び交う、マンゴー・サーラ樹・ティラカ・ジャンブ・ウッダー<sup>カ</sup>樹・パータリー樹が開花(ambā ca sālā tilakā ca jambuyo uddālakā pāṭaliyo ca phullā)、いたるところに蓮池(pokkharañño samantato)、天上の香り(divyā gandhā)漂う。

帰る王に多くの財宝を贈与した。 [Fausbøll: IV, 464-466]

#### 5 2 4 「サンカパーラ龍王前生物語」 [ジャ全 : VIII, 39-46]

昔アジャガハ(王舎城)でマガダ王の第一妃からドゥッヨーダナ(「無敵」の意)としてボデーイッタが生まれた。彼が成長し王位を継ぐと、父は出家したが、日に三度も表敬に訪れる息子が修行の妨げになるので黙って他国の山中に行ってしまった。そのサカパーラという龍王が同じ名の湖に住んでいたが、従者ともどもやって来て父王の説法を聞いた。父の所在を突き止めた息子の王が龍王に会するや、その素晴らしさに憧れ、布施や齋戒を修して、死後サカパーラ龍王に再生した。時がたち、人間界への未練でゆらいだ齋戒を誓いなおし自分の身体を布施として蟻塚に横たわった。そこに、狩猟の獲物がなかった村人 16 人がやってきて、その龍を殺して食おうと 8 本の天秤棒で串刺しにして運んでいた。アーラーラという金持ちが通りかかり、代償をたんまり払って龍を助けた。お礼に龍王は彼を龍の世界に案内する。1 年すごした後、大マニ珠をお土産にもらうが、龍の世界(地形整い(bhūmibhāgehi upetarūpaṃ)、砂利がなく(asakkharā)柔らかい土地(mudū subhā)、草短く(nīcātinā)、塵わずか(apparajā)、・・閑静(anāvakulā?)、瑠璃の青さ(veluriyūpa-nīlā)、四方のマゴー林楽しく(catuddisaṃ ambavanam surammaṃ)、・・常に実をたたえ(niccotukā dhārayantī phalāni)、・・銀の門のついた(rajataggaḷam)黄金の住居(sovaṇṇamayam nivesanam)、黄金・マニ珠で作られた腕輪をつけた女たちで満ちている。・・食物豊か(aneka-sūpa-, vividham viyañjanam)、・・音楽による(turiyehi)もてなし)が誓戒・梵行の功德・果報であるとおもい、俗世の営利を捨てさり出家する。[Fausbøll: V, 168-170]

#### 5 4 3 「ブーリダッタ龍王前生物語」 [ジャ全 : IX, 148-196]

昔、バーラーナシーのブラマダッタ王は、副王である息子の名声が尋常ならざることに疑念をいだき、自分が死ぬまでは隠棲するよう命じた。王子が大海ちかくの草庵で暮らし始めると、大海にある龍宮にいた未亡人になったばかりの若い龍女が煩惱のあまり外の世界を彷徨い、草庵に至った。二人は結ばれ、一男一女をもうける。父王が崩御して戴冠を促されたとき、妻である龍女は自分が猛毒と憤怒性を持つものだからと子供たちを残して身を引く。水生である子供たちのために作られた蓮池に紛

れ込んだ亀が川に投げすてられて大海の龍宮に至り、そこでも捕えられると、自分はバーナシー王から、「ダタラッタ龍王に姫を嫁がせたい」と便りを伝える使者だと嘘をつく。真に受けて婚儀の日取りを決めるため使者を派遣するも、王が拒絶すると、龍が攻め入ろうとする。恐怖にまけた王は娘を龍王に贈る。娘はそこが龍宮とは知らぬまま、黄金とマニ珠でできた宮殿に(suvaṇṇa-maṇi-maya-pāsādādayo)入る。まわりには庭園、蓮池があり(uyyāna-pokkharāṇiyo)天上の都のよう(alamkṛta-deva-nagaram)だった。

ダタラッタ龍王との間にスダッサナ、ダッタ(=ボーデイッタ)スバガ、アリッタという4人の息子ができた。アリッタは告げ口に煽動され母が人間か龍か確かめようと龍の姿を現すと、母は驚き子を投げ捨てたので、彼は片目になってしまった。ダッタは人間界で、蟻塚のうえに自分の身をさらして布薩に専念するようになった。

龍の乙女たちが蛇の姿を消し神の姿となった彼をたたえて花で飾り楽器を奏で踊っているところに獵師のバラモン親子がやってきた。訊ねられるままにダッタ(=ブーリダッタ)は自分の素性を話し、龍宮へ連れて行く。1年間すごしたあと人間界に戻ろうと欲するバラモンの父親。まずブーリダッタの栄華を褒め称えた。平らな大地(samantā mahī)、タガラ香(bahūta-tagarā)、エンジ色の草(inda-gopaka-sañchannā)、鮮やかな緑(harituttamā)、樹木美しく(rammāni vana-cetyāni)、ハチ鳥の美声(rammmā haṃsa-sūpakūjitā)、蓮の花に満ちた池(opupphapadumā tiṭṭhati pokkharāññā sunimmitā)、八角の千の柱でできた瑠璃の(veluriyāmayā)宮殿(pāsādā)、宮女に満ちていた。帰還を申し出る。無病、安樂、家畜も子供にも恵まれるマニ珠を贈与しようとするも、年老いて欲はないからと受け取らず帰還する。途中、蓮池で沐浴しようとして脱衣すると、瞬間にその装身具は消えて龍宮に戻ってしまい、元着ていた黄色い襦袢布だけが残った。バラモン親子の手ぶらの帰還は留守番をしていた奥さんを怒らせた。<以下、略> [Fausbøll: VI, 167, 173-174]

龍の住処ではなく龍自身が変身した船の様相だが、やはり七宝からなる。

190 「海神に救われた篤信な信者前生物語」 [ジャ全：II, 361-363]

難破し島に流れ着いた同船していた二人のうち、在俗篤信家が三宝に帰依すると龍王が現われ帆船の姿となり海神が船頭となって救助した。その際信者は、殺生

肉食したかどで海神に一度は拒絶された理髪師に功德を回向して救ってもらった。  
〈龍王=シャリプトラ、海神=ブツダ〉

龍王が変身した大きな船：七種の宝石(sattahi ratannehi)で満ちていた。三本の柱はサファイア(kūpakā indanīla-maṇi-mayā)、帆は黄金(sovaṇṇa-mayo lakāro)、綱は銀(rajayamayāni yottāni)、床板は黄金(suvaṇṇamayāni padarāni)。[Fausbøll :II,112]

また、観念的な描写で、他と趣が異なるが、以下のような例もある。

第439話「四つの城門前生物語」[Collins: 316-319] [ジャ全：VI, 3-8]

海中の島 (①水晶の宮殿に4人の仙女、7日間の享楽、②銀の宮殿、八人の仙女、③宝石の宮殿、16人の仙女、④黄金の宮殿、32人の仙女) ⑤ウツサダ地獄：4つの鉄の城門) が描かれる。4つの鉄城門は恐ろしいものなのに、主人公には麗しく見えてしまう。つまり、罪人を懲罰するための碾き臼=紅蓮(paduma-)、5重の捕縛縄=胸飾り(uracchada-sādana)、鮮血=赤い梅檀の塗香(lohiya-candana-vilepana-)、泣き喚く声=甘美な歌声(madhura-gīta-saḍḍa-) > [Fausbøll:IV,3] という具合に。

この話しにおける宮殿の描写は、地獄や天界を観て回ることを語る第541話「ニミ王前生物語」[ジャ全：IX, 95-120] と類似している。

### (3) 『マハーヴァストゥ(Mahāvastu)』

サンスクリット語ではあるもののプラークリットの様相ももつ、いわゆる仏教梵語であまれた仏伝文学で4、5世紀までに[湯山]、もしくは6世紀頃に[平岡 2002:150-151] 成立したとされるこの書に「龍王チャンパカ本生話(11-1)」[平岡 2001:16] がある。

・ ・ チャンパカと呼ばれる龍王が住んでいた。彼は福德をなし、卓越した善を積み、何千という多くの龍を従者としていた。その時、龍王チャンパカの住居(caṃpakasya nāga-rājño bhavanam)は、天の住居に等しく(deva-bhavana-saṃnibham)、七宝から成る宮殿であり(sapta-ratna-mayāni vimānāni)、何時でもどこでも[木々には]花や実が生っており(sarvatrakāni sarva-kālikāni puṣpa-phalāni)、宝石からなる蓮池(ratna-mayāyo puṣkariṇīyo)は、青蓮華・黄蓮華・赤蓮華・白蓮華で覆われてい

た(utpala-padumanalini-kumuda-puṇḍarīka-saṃchannā)。その蓮池からそう遠くない所に、宝石から成り、瑪瑙を地面とし、瑠璃を柱とした楼閣(vaidūrya-stambha-prasādao ratnāmayo musāragalvatalāstrīto)があった。そして王には一万六千の龍の娘がいる後宮があった。その時、彼はその龍宮で天王のように楽しんでいた。・・・  
[平岡 2010 : 400] [Senart:II,177] (cf. ジャータカ 506)

#### (4) 『ディヴィヤ・アヴァダーナ (Divyāvadāna)』

同じ仏伝文学で、10 世紀前後、西北インドで編纂されたとされる [平岡 2002 : 150] この書にも、龍の住まいが荘厳に描かれている。

##### 第 30 章「スダナ王子の恋愛」

・「王よ、あそこ (北パンチャラ国<水野補>) には、またもう一つ利点がございます。あの都城には、青・赤・白の蓮華が咲き乱れ(utpala-kumuda-puṇḍarīka-saṃchanna-)、白鳥・アヒル・チャクラヴァカ鳥によって荘厳された大池(hamsa-kāraṇḍa-cakravākopaśobhito mahāhrada-)があり、そこにはジャンマチトラと呼ばれる龍の子が住んでおります。彼は適時に雨を降らせるので、穀物は大豊作であります。奴のお陰で、その大地には穀物が溢れ、国土は食物・飲物に恵まれているのです」・・・ [平岡 2007: 210, Vaidya:283-284]

#### (5) 『不空羂索神変真言経(Amoghapāśakalparāja)』

密教関係の仏典にも類似する表現があることを、学会報告 (第 58 回国際東方学会議(2013,5,24) 種村隆元氏報告「密教興隆の要因に関する一考察」[Tanemura]) で知った。7 世紀頃の成立とおぼしきこの経典の研究は途についたばかりのようだが、上記報告のなかで荒唐無稽な例として言及された洞窟成就法 (bila-sādhana-) とは、マントラで洞窟の入り口を開けてナーガの住む地下世界へ赴き、そこでナーガやアスラの美女たちと享楽にふけるのだという。テキストの一部だけだが、掲げておこう。

sapta-ratna-maya-puṣki(?a)riṇīm... divyaṃ candana-gandhikam / nāti-śītan  
nātyuṣṇam / ...amṛta-rasāyanam/ .. nana-vicitra-divya-puṣpa-samalaṃkṛtaṃ /  
.....mahā-maṇi-ratnaṃ kśīrodakaṃ sravati / ... [伊藤他:131]

### III-3 二大叙事詩から

#### (1) 『マハー・バーラタ (Mahā-bhārata)』

ナーガの世界にかかわる描写 [Hopkins: 26] は、以下のものである。

(パ<sup>ン</sup>ダ<sup>グ</sup>ァ<sup>ア</sup>5兄弟は共通の妻<sup>ラ</sup>パ<sup>テ</sup>ィ<sup>イ</sup>と誰か1人が会しているときは他の4人はその様子を決して見ない約束をしていたが、あるとき盗賊に牛を盗まれたバラモンを助けるべくアルジュナは熟考したのち武器を取るため、<sup>ユ</sup>ヰ<sup>イ</sup>ヰ<sup>テ</sup>ィ<sup>ラ</sup>が妻と会している部屋に入ってしまう。その罪でアルジュナは12年間、森で禁欲生活をすることになった。) ある日、アルジュナが火の儀礼をおこなうため灌頂しようとガンジス川に降りて先祖供養してから上がろうとすると、龍王の娘ウルーピーが一目惚れし、彼を水中に引き入れた。

アルジュナは、そこで、<sup>カ</sup>ラ<sup>ラ</sup>ガ<sup>イ</sup>ヤ<sup>龍</sup>の**最高に飾りつけられた宮殿**(paramārcite bhavane)において、見事に設置された聖火を見た。アルジュナはそこで火の儀礼をおこなった。彼は恐れることなく火中に供物を投じたので、火は彼に満足した。・・

全ての事情を知るウルーピーから、地上世界の掟はここでは関係ないからと、求められて一晩をともに龍宮で過ごし、太陽が昇ると同時に立ち去った。[上村: II, 174-176 <MBh. I, 206>]

神の駆者マータリがミニ王に諸地獄と諸天界を案内する話が、『ジャータカ』第541話「ミニ王前生物語」にあったが、それと軌を一にしているのが以下である。

インドラの友人である御者マータリが、妻スダルマーと相談し、娘<sup>カ</sup>ケ<sup>シ</sup>の婿候補が人間界にも神の世界にも容姿の点で適うものがないので、龍の世界に探しに行くことにした。水の主ヴァルナに会うため天界を出たナーラダ仙と遭遇して地下世界を案内してもらうことになる。

(第5巻、第95章) マータリ、娘の婿を求めて地底界に行く。・・・(第96章) 偉大なマータリとナーラダの両者は、地中に飛び込んで、世界守護神である水の主に会った。・・・すべて黄金造りの (sarva-kāñcanam)、<sup>バ</sup>ァ<sup>ル</sup>ニ<sup>ー</sup>の御殿(bhavanam)を見なさい。・・・(第97章) ナーガの世界の臍のところ、<sup>パ</sup>ァ<sup>ター</sup>ラと呼ばれ

る都市がある。そこにはダイティヤとダーナヴァ（魔類）が住む。動不動のいかなる生類でも、水とともにそこに入ると、恐怖に苦しみ大声で叫ぶ。・・・『ここには私の気に入るものは誰もいない。他に行ってくれ』（第98章）これはヒラニヤプラと呼ばれる大都市であり、幾百の幻力で動きまわるダイティヤとダーナヴァに属する。・・・それはパーターラの表面に建っている。・・・金銀でできた家々(raukmāṇi rājatāni veṣmāni)を見よ。・・・瑠璃により緑色(vaiḍūrya-harītāni)、珊瑚により輝かしく(pravāla-rucirāṇi)、水晶のように白く(arkasphaṭika-sūbhṛāṇi)、ダイヤモンドのように輝かしい(vrajasārojjvalāni)。・・・宝石をちりばめた格子窓(maṇi-jāla-vicitrāṇi)で多彩であり高くそびえ、・・・滝のある雲のような山々、望みのままに花と実(kāma-puṣpa-phala-)をつけ、自由に移動する樹々(pādapa-, kāma-cāri-)を見よ。・・・

(第100章) ・これがラサータラという第七の地底界である。そこに、甘露から生まれた(amṛta-sambhava-)スラビという牛族の母がいる。彼女はいつも地上の最上のものを生み出す乳を出している。・・・地面に落ちた彼女の乳の流れから、乳をたたえた湖(kṣīra-nidhiḥ hradah)が作られた。それは最高に浄化するものである。・・・『龍の世界においても、天界においても、天宮（ヴィマーナ）においても、インドラの世界（トリヴァṅガ）においても、ラサータラにおけるほど生活は快適ではない。』・・・

(第101章) これがヴァースキに守られたボ-ガヴァティーという都である。・・・ここにシェーシャ龍が住む。(マータリはここでスムカという龍を娘の婿として見初める。)

[上村：V, 301-313<MBh.V, 96-101>]

地下世界ではないが、荘厳なる空間の描写の例として次の箇所を参考までに挙げておく。

(第2巻第3章) キンカラという八千名の羅刹たちが、マヤに命じられて、その集会場を守り維持した。・・・マヤはその集会場のなかに類ない蓮池(apratimā nalinī)を作った。それは瑠璃の葉におおわれ(vaiḍūrya-patra-)、宝玉の茎よりなる蓮に(maṇi-nālamayāmbuja-)満ちていた。紅蓮 (padma-) と白蓮 (saugandhika-) に満ち、種々の鳥の群れ(nana-dvija-gaṇa-)がいて、開花した蓮(puṣpitaiḥ paṅkajais)で色とりどり(citra-)になり、亀や魚により(kūrma-matsyais)飾られていた(śobhita-)。美しい岸の階段(sūpatīrthāma-kaluṣa)があり、すべての季節に汚れない美しい水(sarva-rtu-salilāṃ

śubhām)をたたえ、風に吹き散らされた真珠の粒(muktā-bindu-)に満ちていた。・ ・ 宝珠や宝物におおわれた (maṇi-ratna-cita-) その蓮池・ ・ ・その集会場のまわりには常に花をつけた種々の大樹(nityaṃ puṣpavanto mahā-drumāḥ)があった。それらは青々(nīla-)として、涼しい陰(śīta-cchāyā-)を投げかけ、心地よい(manorama-)ものであった。いたるところ芳香のする森(sugandhīni kānanāni)と、ハンサ鳥やカランダヴァ鳥のいる(haṃsa-kāraṇḍava-yutā)、チャクラヴァカ鳥に飾られた(cakravākopaśobhitā)蓮池(puṣkarīṇī)があった。・ ・ ・ [上村 : II, 242] <MBh., II, 3, 25-34>

## (2) ラサータラ

先の『マハーバーラタ』中、マータリの婿探しの段に、地底第七の世界として言及されたラサータラ (rasā-tala-) の、複合語の前分ラサー (rasā-) は、『リグ・ヴェーダ』では世界の最果てを取りかこむ川で[辻 1970:289,291]、創造神ヒランニャ・ガルバ (黄金の胎児) に大海もろとも属すとされる [同,317] ものと同音の単語である。もしこれと関係するとすれば「ラサー川の底」あるいは「ラサー川を地表にもつ所」といった解釈もでき、『リグ・ヴェーダ』からの連続性を仄めかしているが、定かではない。ラサータラという語は、同じ『マハーバーラタ』の次の箇所にも見られる。

III(Vana Parvan:森林の巻), 188-69, 251-29, V(Udyoga P. : 努力の巻), 102-1<大地の七番目の層で、そこで甘露の中から牛たちの母スラビが生まれた>, 14<ナガローカ (龍の世界) や天界 (svarga-) よりも暮らすのに快適で幸福である>, XII(Śānti P. : 寂静の巻), 206-26<ヴィシュヌ神が猪のヴァターとなりその牙でアスラを退治した>, 347-54, XIII(Anuśāsana P. : 教説の巻), 6-34<ヴァス王は嘘をついたかどで至る>, XVIII(Svargārohana P. : 天界の巻), 5-28<アナンタの住むところ> [Mani: 643]

また、『ラーマーヤナ (Rāmāyaṇa)』の結末でスィーターの最期におもむくのがラサータラである。

そこで、大地の女神ダラニーは、両手でミティの娘 (=スィーター) を抱えて、喜んで招き入れ、彼女を玉座に坐らせました。席に着いた彼女が、ラサータラに入っていくのを見て、女神は絶え間なく花の雨を降らせました。(VII, 88-13,14)



### III—4 プラーナ文献から

ヒンドゥーの宇宙観・世界観については種々のプラーナに記述されているが、地下世界については、理想郷のような存在のパーターラ(pātāla)が七種、罪人が死後赴くような、いわゆる地獄ナラカ(naraka)にも七種あるという。[Rocher:130]

(1) 『ヴィシュヌ・プラーナ (Viṣṇu Purāṇa)』 (成立年代諸説 BC7C. ~AD11C. 編者：現アーンドラ州出身? [Rocher:249])

このプラーナではナラカが 28 種類すべて陰惨な場所として描かれているそうだが [定方 2011 : 65] が、同書第 2 巻第 5 章は、七種の Pātāla (すなわち Atala(白), Vitala(黒), Nitala(紫), Gabhastimat(黄), Mahātala(砂色), Sutala(石色), Pātāla(黄金色)) が挙げられ、つぎのような描写もある。

svarlokād api ramyāṇi pātālānīti nāradaḥ /  
prāha svarga-sadāṃ madhye pātālebhyo gato divi //5//  
āhlāda-kāriṇaḥ śubhrā **maṇayo** yatra suprabhāḥ /  
nāgair ābhriyamāṇāsu pātālaṃ kena tat samam //6//  
daitya-dānava-kanyābhir itaś cetaś ca śobhite /  
pātāle kasya na prītir vimuktasyāpi jāyate //7//  
divārkaraśmayo yatra prabhāṃ tanvanti nātapam /  
śaśinaś ca na śītāya niśi yadyotāya kevalam //8//  
bhakṣya-bhojya-mahāpāna-muditair atibhogibhiḥ /  
yatra na jñāyate kālo gato 'pi danujādibhiḥ //9//  
**vanāni nadyo ramyāni sarāmsi kamalākarāḥ** /  
puṃskokilābhilāpāś ca manojñāny aparāni ca //10//  
**bhūṣaṇāny** atiramyāni **gandhāṭyañcānulepanam** /  
**vīṇā-veṇu-mṛdaṅgānām svanās tūryāni** ca dvija //11//  
etāny anyāni codārabhāgyabhogyāni dānavaiḥ /  
daityor agaiś ca bhujyante pātālāntara-gocaraiḥ //12//  
pātālānām adhaś cāste viṣṇor yā tāmasī tanuḥ /  
śeṣākhyā yad guṇān vaktuṃ na śaktā daitya-dānavāḥ //13//  
yo 'nantaḥ paṭhyate siddhair devī deva-rṣi-pūjitaḥ /

sa sahasra-śirā vyakta-svastikāmala-bhūṣaṇaḥ //14// (V.P.II) [Wilson 1980: I,295-296]

(5) 諸パーターラ界より天に戻ったナーラダ仙が天界の人士たちのなかで、「諸パーターラ界は最上天（インドラの世界）よりも楽しい」と言いました。「(6) ナーガたちによって美しく輝き照らす数々の宝珠が保持されている、そのパーターラ界は何に匹敵しようか？ (7) ダ行イヤやダーガァの娘たちによってあちらもこちらも荘厳されたパーターラ界で、離欲の者すら喜びが生じるのに、誰が喜ばないだろうか？ (8) そこでは昼間太陽が光を放つ暑くなく、夜は月が冷たさのためではなく明るさのためにのみ輝きます。(9) そこでは、ご馳走をたべ強い酒をのんで楽しむダヌの一族たちによって、時がたつのも忘れられている。(10) 美しい森、川、池があって、それらは蓮華に満ちている。雄のコーキラ鳥（郭公）の声こだまする魅惑的な空がある。(11) 絢爛豪華な装飾品、芳香ただよい、豊かな練膏、弦楽器（ヴィーナ）、管楽器、打楽器が調和する音楽や歌もあります。バラモンよ (12) ダーガァやダ行イヤ、蛇族たちパーターラを住处とする者たちによって、これらやほかの楽しい娯楽が楽しまれています。(13) これらのパーターラの下に、ヴィシュヌ神の暗 質の姿であるシェーシャという名のものがいて、その諸々の徳をダ行イヤやダーガァは語るできません。(14) シッダたちによってアナンタと呼ばれ、女神、神、リシに崇められるその者は、千の頭をもち、明らかに吉祥清浄な(卍)印をもっています。

『バーガヴァタ・プラーナ (*Bhāgavata Purāṇa*)』および『パドマ・プラーナ (*Padma Purāṇa*)』<sup>9)</sup>では七つのパーターラの名称が少し異なり、Atala, Vitala, Sutala, Talātala, Mahātala, Rasātala, Pātāla だとい

---

<sup>9)</sup> 『パドマ・プラーナ』は、西インド伝本とベンガル伝本では異同が激しく、創世 (sr̥ṣṭi-)、地上界 (bhūmi-)、天界 (svarga-)、地界 (pātālā-)、結末 (uttara-) という5つの巻 (khaṇḍa) からなる後者の「地界の巻」にのみ7つのパーターラが言及されているという。[Rocher:210]

う。[Wilson 1980: I,295] ここでは、先の『マハーバーラタ』の箇所では第7番目の地下世界とされたラサータラが第6番目にカウントされている。

### III-5 カーヴィヤ作品から

宮廷を主たる場として娯楽を提供した表現豊かなカーヴィヤ (kāvya) 文学の始原は紀元前後ころの仏教詩や仏教劇、あるいは『ラーマヤナ』におかれることもあるが、10世紀の詩論家ラージャシェーカラ (Rājaśekara) によると、紀元前4世紀頃の、あのサンスクリット文法学者パーニニ (Pāṇini) に『パーターラ・ヴィジャヤ (Pātāla-vijaya)』という宮廷詩作品があった [Keith:45] [ゲインテルニツ: 30] という。だが、テキストは散逸してその中身も未詳である。『地界の制覇』という題名から推して甚だ興味深いが致し方ない。

7世紀前半の詩人バーナ (Bāna) は、仕える王の、フィクションを交えた一代記『ハルシャ・チャリタ (Harṣa-carita)』のなかで、ナーガールジュナ (Nāgārjuna) なる人物が龍宮を訪問、ヴァースキ龍王から頂いた真珠の瓔珞を、友人であるサータヴァーナ・ハルシャ (Harṣa) 王に進呈する経緯を記している。 [Vogel:18, note3] [Yamano2008]

ハルシャ王の妹ラーヂヤシュリーが嫁いだマウリカ王家のグーラハヴァルマンがマールヴァ王に討伐され、幽閉された妹を兄ラーヂヤ・ヴァルダナが救出するも、その兄もガウダ王の陰謀で憤死する。ハルシャが妹を探してヴァンディヤ山中に入り (第8章～)、殉死しようとしている妹を見つける。 [辻 1973 : 117-118]

森で出会った聖者から、妹と思しき消息を聞き、その場所を尋ねる。ハルシャは、殉死しようとしていた妹ラーヂヤシュリーを発見する。聖者がハルシャに語る。

「君主よ！お聞きください。あなた様に申し上げるべきことがございます。あちら（神の世？）の、夜のイヤリングなる、気まぐれな月が、若さに驕り、多くの妻たちを軽蔑したのですが、若さに燦然と、インドラの顧問僧ブリハパティの妻ターラーをさらってしまいました。彼女を妻にしたいと、天界より飛び立って、楽しい場所を探し回りました、目は怯える鶉（ウズラ）のように美しく、四肢は愛らしく、彼の愛に適った彼女をつれて。しかし、

ついには神々の言葉を尊重して、彼女を言説の主である夫に戻してあげました。でも、彼の心は薪などないのに彼女を欠いたことで絶えず燃えましました。[Cowell : 240-241]

ある日、彼が東の山から昇ろうとしたとき、大海の清浄な水面に自分が映っているのを見ました。凝視すると、たわいもなくターラーの微笑む顔を思い出しました。激情に突き動かされ、天界においてではありますが、目から大粒の涙をこぼしました。その涙たるや、あらゆる蓮華の輝き(kumuda-vana-prabhā-)を飲みこんでいるかのように明るいものでした。海に落ちた涙を全て阿古屋貝が呑みこみました。涙が阿古屋貝の胎内で真珠(muktāphala-)になると、地獄に住む(rasātala-nivāsī)蛇族の王ヴァースキが、何とかそれを手に入れ、それらを使って1本のレースをつくりました。それは地獄なのに(pātālatale'pi)星の房のように輝きました。彼はそれをマダキーニ(Mandākinī)と命名しました<sup>10)</sup>。あらゆる植物の君主である聖ソーマの験力によって、それは一切の毒を除去する解毒剤となりました。そして、常に冷たい甘露の泉なる月から造られた結果、それに触れるとあらゆる生類の痛みを除いたのです。そこでヴァースキは常にそれを持ち歩き、毒の燃える熱を冷ましました。

時すぎて、ある日、ナガールヂョクという名の托鉢僧がナーガたちによって地獄(pātālatala-)に連れてこられました。彼は蛇王に贈り物としてそのレースを請い、獲得しました。彼が地獄(rasātala-)から出ると、それを、三海の領主である友人サタヴァハ王に進呈しました。時降るなかで、そのレースは師子相承して私たちの手にいたりしました。あなたのように高貴なかたに贈り物を進呈するのはご無礼にあたるかとも思いますが、かたじけなくも、この毒に対する潜勢力を考慮して、お受け取りいただきたくお願い申し上げます。あなた様は薬効をご存知ですし、あらゆる生類を守護することに懸命であられますから、あなたのお命は守られるに値するものなのです。」と言って、彼は近くに立っていた乞食僧の衣に包まれていた真珠のレース(ekāvali)、マダキーニを取り出しました。[Cowell: 249-251] [Kane: 137]

---

<sup>10)</sup> ここまでの和訳は、サンスクリット・テキストと共に、[原 1966b:179-181]に紹介されている。

### Ⅲ-6 とりわけ説話文学から

#### (1) 『カター・サリット・サーガラ (*Kathā Sarit Sāgara:KSS*)』

11世紀後半、宮廷文化が栄華したカシュミールで、ソーマデーヴァ (Somadeva) が編集したこの説話集には、大海原を乗り越えてエルドラードへ辿り着かんとする航海冒険譚に富む「黄金城物語」[岩本 1957:174-184]がある。そこでは、海底界の入口である渦巻きに飲み込まれることなく超えた先の榕樹から鳥に運ばれて至った(従って地下でも海底でもないようだが) ヴィディヤーダラ(半神族)の都、黄金城[岩本 1957:130-132,157]の情景描写は、ごくわずか「宝玉の橋の架けられた池のある園林 (*ratna-sopāna-vāpī-hrdayodyāna-*)」に囲まれているとある。[Śāstrī J:116]

また、この *KSS* に含まれている「鳥王ガルダと龍族の物語」[岩本 1958:42-50]には、龍宮の描写は詳述されていない。この物語は、これら説話集のオリジンでありパイシャーチー (*Paiśācī*) というブラークリットで編まれていたとされる散逸した『ブリハット・カター (*Brhat-kathā*)』 (by *Guṇāḍhya*) に遡るとおもわれるが、同じくそれに起源し[原 1966a:430]、*KSS* より先んじて7世紀に、上述した『ハルシャ・チャリタ』の主人公でもあるハルシャ大王が戯曲作品化した『ナーガーナンダ (*Nāgānanda*)』にも、ナーガ龍<sup>11)</sup>の住処の風景があるのではないかと探したが、描かれていなかった。

#### (2) 『屍鬼二十五話 (*Vetāla-pañcaviṃśatikā*)』

おなじ *KKS* の挿話である『屍鬼二十五話』に「海中都市」と銘打たれた物語が二つあり、いずれも海底の都の荘厳さを語っているので、見ておこう。

---

<sup>11)</sup> 登場人物であるナーガが、「頭上で合掌して」などというト書があることから、ナーガ役の役者は人間の姿のまま衣装や化粧によって装っていたことが分かる。バラタによる戯曲論『ナーティヤ・シャーストラ (*Nāṭyaśāstra*)』*Āhāryābhinaya* 章 50, 89 に、それぞれナーガの男女に扮する方法が規定されている。(Panchal, Goverdhan, *The Theatres of Bharata and Some Aspects of Sanskrit Play-production*, 1996, Delhi; Munshiram Manoharlal, pp.86-97.および *Nāṭya-śāstra by Bharatamuni* tr. by A Board of Scholars, n.d., Delhi; Sri Satguru Publ., pp.313-316.を参照。)

## 第7話「海中都市（一）—阿修羅の娘と結婚した男」

東方の海岸地帯にターマプティという都があり、そこにチャンダバシハという王がいた。ある時、デカン地方出身の貧しいラージポート、サットヴァシーラ (S) が仕官した (=王の前で襤褸服を引き裂いた)。狩猟に出掛けた王が、巨大な猪 (matta-sūkara-) <sup>12)</sup>を追いかけているうち道に迷い、S と二人きりになった

---

<sup>12)</sup> 猪 (varāha / sūkara (śūkara)) はヒンドウの脈略ではヴィシュヌの化身 (avatāra) として重要であるが、ヴェーダのサンヒター成立時点では退治すべきものとされ、「野猪退治の物語」に「・・・ここに野猪 (āmūṣa/ emūṣa/ vāmamoṣa) 石もて作りたる 21 個の砦・・7 個の山の彼方にあり。かの中にアスラたちの意味じき財宝存す。彼を殺せ!・・・」(Maitrāyanī-saṃhitā III, 8, 3 / Kāthaka-saṃhitā XXV, 2 / Taittirīya-saṃhitā VI,2,4,2-3) [辻 1978] (Kuiper, F. B. J., 1950, *An Austro-Asiatic Myth in the Rigveda*. Noord-Hollandsche Uitg. Maatschappij.には猪の Proto-Munda 説あり。)とある。ブラーフマナ時代にはアーリヤ化し、「Prajāpati が猪の姿をとって蓮葉のもとを探しに水中に入る。」[Kintaert: 3] (Śatapatā Brāhmaṇa XIV,1,2,11 / Taittirīya Brāhmaṇa I,1,3,5ff) [Prasad: 7-9, 21-23] [上村 2003 : 267-268] などと、大地を持ち上げているものとされる。以降、ヴィシュヌが猪 (sūkara) に化身して、大地と同棲し、息子 Naraka が産まれた (Viṣṇu Purāṇa V, 29, 23) [Solomon: 37] とされたり、アヴァターラとして『バーガヴァタ・プラーナ (Bhāgavata Purāṇa)』(III,13) に、次のような神話を産んだ。

大地が水中に没したままだったとき、梵天の息子マヌが梵天に大地の引き上げを頼んだ。梵天はヴィシュヌ神に頼むと、その鼻孔から親指大の仔猪が出て来て、見る間に巨大化した。その猪であるヤジュニャ・プルシャ (=ヴィシュヌ) が大地を牙で持ち上げると、ヒラニャークシャ (悪魔) が襲いかかるも撃退する。[上村 2003 : 265] (Rāmāyaṇa II, 110, 3 ではブラフマー神が猪に化身して大地を持ち上げる。[Gonda: 140] )

バーバラは、「ヴィシュヌがイノシシに化身するという事は、万物を創造する聖なる生命の血、つまり女神の溶媒 (錬金術で卑金属を金に変えるものをいうが、これは精子を胎児にするのは子宮内の経血によるものだという発想からきたもの) を男性に再び与えようとしたことを表したものであった。」とし、タキトゥスの言 (アーリヤ人は「神々の母親を崇拜し、宗教的なシンボルとして、イノシシを表すしるしを身に着けた。）」を紹介している。[バーバラ : 90—91] 猪の土を掘り返す生態が、大地と交合しているかのごとくとらえられたのは、日本の地方都市近郊にも出没するようになって観察機会がある我々にも、合点がいく。

また、KKS には、仏陀の分身から生まれた賢明な猪が、飢えた獅子の親子に我が身をなげうって救い、正法の神の果報を得て聖仙になる「猪本生物語」[岩本 1961:77-80] が含まれる。このあと紹介する『獅子座三十二話』の挿話にも猪が洞窟への案内役として登場する。

### <猪関連の参考文献>

Doniger, Wendy, 1975, *Hindu Myths*, Penguin Books, pp.184-197.

とき、S は所持していたアーマラカの実を王に差だすと、王は二つをもらって食べ飢えをしのぎ帰着できた。その功績がみとめられ、S は側近に取り立てられた。

ある日、王はセイロン王女に求婚するため S をセイロンに派遣した。海路、海中から黄金で色とりどりの旗竿が飛び出し、同時に大嵐となる。S は剣を握って海中に飛び込むや船は壊滅、他の乗組員は怪魚（ヤダス）の餌食に。S は海底で、神々しい都（divyān purīn）を見つける。「そこは、宝玉づくりの柱で輝く黄金の宮殿(maṇi-maya-stambhair bhāsvare hema-mandire)があり、それは溜池のある庭園で飾られて(vāpīkodyāna-śobhin-) いました。その池には素晴らしい宝石をちりばめた階段(sad-ratna-baddha-sopāna-)がついておりました。彼はそこにメール山のように聳え立つ(meru-pronnata-)ガウリー女神の神殿を見出しました。その石の壁面には種々の宝石が嵌め込まれていました(nānā-maṇi-śilā-bhitti-)。そして宝石をちりばめた高い幡(ratna-citrocchrita-dhvaja-)がそこに立っていました。」女神を礼拝していると、「光の環」から天女（青蓮のような眼、・・動く蓮池のごとき）が数千の侍女たちと参拝に現われ S の心を捉えて戻っていく。S は追って「光の環」の中に入ると、そこはあらゆる享楽が会した庭園のような都だった。侍女から、食事を所望するから溜池で沐浴するよう指示され、そこで頭をつけて沐浴して顔を上げた瞬間、S はチャンドハ王宮の庭の

- 
- Gonda, J., 1969 (1<sup>st</sup>. 1954), *Aspects of Early Viṣṇuism*, Delhi; Motilal Banarsidass, pp.129-145.  
Krishna, Nanditha, 2010, *Sacred Animals in India*, Penguin Books, pp. 53-58..  
Kintaert, Thomas, 2012, “On the Role of the Lotus Leaf in South Asian Cosmography”, *WZKS*, 54, pp.85-120 (postprint pp.1-30).  
Nagar, Shanti Lal, 1993, *Varāha in Indian Art, Culture and Literature*, Delhi; Aryan Books International.  
Prasad, Maheshvari, 1989, *Some Aspects of the Varāha-kathā in Epic and Purāṇas*, Delhi; Prtibha Prakashan.  
Solomon, Ted J., 1970, “Early Vaiṣṇava Bhakti and Its Autochthonous Heritage”, *History of Religions*, vol.10, no.1, pp.32-48.  
Vassilkov, Yaroslav, 2012, “The Boar shakes the Mud off: A Specific Motif in the *Varāhakathā* of the Great Epic and Purāṇas”, John Brockington ed., *Battle, Bards and Brāhmins* (Papers of the 13<sup>th</sup> World Sanskrit Conference, vol. II), Delhi; Motilal Banarsidas, pp.301-314.  
岩本 裕 1961『インド古典説話集カター・サリット・サーガラ（四）』（岩波文庫）岩波書店。  
上村勝彦 2003『インド神話—マハーバーラタの神々』（ちくま学芸文庫）筑摩書房、265-268頁。  
辻 直四郎 1978『古代インドの説話—ブラーフマナ文献より—』春秋社、169-175頁。  
バーバラ・ウォーカー著、山下主一郎主幹、青木良孝ほか訳、1988『神話・伝承事典—失われた女神たちの復権』大修館書店。

溜池に戻っていた。

王に経緯を報告すると、そのアスラの娘を S に得させようと、共に大海に乗り出す。S の案内のもと、二人は海中の都に到着。女神の社で、件の天女は王のほうに心奪われる。庭園にいた王にちかづく彼女。「樹 (pādapa-) の上で種々の鳥たちが囀り (vicitra-śakunālāpa-)、風でその腕のような蔓草を揺さぶり (vātāñjita-latā-bhuja-)、花々をまきちらし (vikīrṇa-kusuma-)」王は S を差し出そうとすると、彼女は「光の環」のなかの第二の都に王を招じ入れようとする。そこでは「木々はいつも花や実をつけ (sadā-puṣupa-phala-druma-)、すべての季節が常に出現していた (nitya-saṃnaddha-sarva-rtu-)。メール山の頂き (meru-prṣṭha-) のように、すべて宝石や黄金で (ratna-kāñcana-) 出来ていた。」そこで、彼女は素性を明かす。ヴィシュヌに殺された阿修羅王カラネミの娘で、ヴァイシュヴァルマンが作った二つの都を受け継いでいると。王は S を彼女と結婚させ、S は阿修羅の都の支配権をえる。ダイヤの娘は、暇乞いする王に、アパラジタと銘打たれた剣 (khaḍga-) と不老不死の (jarā-mrtyu-hara-) 果実 (phala-) を献上した。示された池に飛び込んだ瞬間、王は自分の王宮の池から浮かび上がった。[上村 1978:67-77]  
[Śāstrī J:421-424]

## 第 12 話「海中都市 (二) 一天女を妻にした王」

昔、アンガ国に、好男子のヤシャケトウ (Y) という王とその宰相ディルガダルソ (D) がいた。平穏が続くと、王は若さと美貌から、後宮での快樂に耽溺するようになり、誰の忠告も聞かない。一方、宰相が政務に精励していると、宰相を揶揄する評判がひろがり、自分の妻メーダーグァーに相談すると、妻から聖地巡礼のためにお暇をもらっては、と助言をうけ、そのとおりにする。

巡礼中の D が、プンドラ地方の海岸端にある都でシヴァ神殿に詣でていると、ニディグッタ (N) という商人がいた。世話好きな N は、旅で疲弊し汚れた D を自宅につれてかえり、もてなした。元気を取り戻した D は、自分がアンガ国の宰相だとは言わないまま、商人 N の黄金島への商用に同行する。その帰途、突然、海中から如意樹が出現。それは珊瑚の美しい枝や金色に輝く幹、宝石で出来た美しい果実や花で飾られており、その幹にソファにすわる美少女が琵琶を手にして、歌い始める。歌い終えるや、忽然



と海中に消えた。Dには、初めての体験で驚愕のないものでもなかったが、水夫たちはしばしば目にしていた。Nの家に戻った後、Dは帰途につく。

出迎える王に、Dは海上の天女の話をする。Y王は、話の中の天女にすっかり魅了され、Dに政務をなげ、ひとり、あの海に向かう。途中で出くわした牟尼からの助言どおり、ラクシュミダッタという商人の船にのり、天女に出会った。歌の後、海中に消えようとする天女の後をおって、王が海に飛びこむ。そこには、輝かしい宮殿の都がありました。宮殿の柱は燦然たる宝玉で(bhāsvan-maṇi-maya-stambha-)できていて、壁は黄金できらめき(kāñcanojjvala-bhitti-)、格子窓は真珠で出来て(muktājāla-gavākṣaka-)いた。都を飾り立てる公園には、溜池(vāpika-)があり、様々な宝石でモザイク模様を施した階(nana-ratna-sīlāpaṭṭa-baddha-sopāna-)がついていた。また、その公園(udyāna-)は如意樹(kalpa-vṛkṣa-)に満ち、すべての欲求を満足させた(kāma-da-)。都には人気はなかったが、ある御殿のなかに、あの天女を見つける。問われるままに、素性と経緯をはなすと、彼女は、ムリガーンカデーヴァというヴァイデーダラの娘、ムリガーンカデーヴィ(M)だと名乗り、父が何らかの事情で、自分ひとりをこの都に残して、どこかへいってしまっていることを伝えた。王が求婚すると、毎月白半月と黒半月の各8日と14日目は、自由に行動させて欲しいと条件をつけた。それを受け入れ結婚し、二人は官能の喜びに耽る。約束の日が来て、彼女が出掛けると、王は密かに後をつけた。羅刹が彼女を喰うのを見て、王は剣を抜いて羅刹の首を切り落とす。興奮する王のもとにMが無傷で現われでて、過去の思い出を語る。それは、シヴァ神参拝に夢中で帰りが遅くなった彼女を、父親が怒って、月に4回、羅刹に喰われ、そのたびに胸を割って生きて出てくるといふ呪いを掛けられているという。その呪いが解けるのは、Yという王がお前と結婚し、羅刹を退治したときだとの予言もあったという。呪いが解けたので、故郷、ニシャダ山へ帰ろうとするMに、あと7日間だけ、ここで楽しみたいと懇願する。6日間、二人は池で遊ぶ。その池たるや蓮華という眼に涙を浮かべ、波という手を挙げて、ハンサ鳥やサーラサ鳥の声(hamsa-sārasa-niḥsvana-)で、二人に行くな、と嘆息するよう。7日目、地上に通じる溜池に彼女を掴んだまま飛び込み、地上に戻った。Mは神通力を失い、空も飛べず、塞ぎこむも、王は彼女を完全に我が物としたと喜ぶ。それを見た宰相Dは、その夜、自宅で突然心臓発作をおこして亡くなってしまっ

た。その後 Y は政務に励み、M とともに長く暮らした。[上村 1978:104-119]  
[Śāstrī J:430-434]

(3) 『獅子座三十二話 (ヴィクラマ王の事績) (Simhāsana-dvātriṃśikā, Vikrama-carita)』

13 世紀頃に編纂されたと見られる [辻 1973: 156] この説話集は、かつてヴィクラマ王が使用していた獅子座 (=玉座) を後年土中より掘り出したボージャ王が設え直して自ら坐ろうとすると、その椅子に施されていた 32 体の女人の彫像がボージャ王に、ヴィクラマ王の寛大さ極まる雄々しき所行を一話ずつ語り聞かせる。そうした寛大さを持ち合わせているか問われ、二の句が継げないボージャ王は、いつまでもその玉座に坐ることが能わないという枠構造をもっている。5 系統の伝本があるが、南インドに伝わるヴァージョンから、次の話を紹介したい。和訳が未刊行なので、少し長くなるが、全訳を掲げておく。

第 19 話(南インド・ヴァージョン) [Edgerton: I, 161-163, II, 147-149 ]

ふたたび王が獅子座に腰掛けようとする、別の人形が声を掛けた。「王様、もしあなた様にヴィクラマ王と同様の寛大さなどの徳があるなら、この獅子座にお座りください。」王が言った。「おい、人形！その方の寛大な所行を語っておくれ。」彼女は語った。「王様、お聞き下さい。

ヴィクラマ王が大地を統治している頃、世間では、あらゆる人々が心満ちていました。バラモンたちは 6 つの行儀に専念し<sup>13)</sup>、女性たちは夫の安全を願う誓い (pati-vrata-) を守り、人々は長寿で、樹木はつねに実を結び、雨の神 (parjanya-) は意のままに雨を降らし、大地はいつも豊作でした。人々は罪悪にたいする怯え、客人に対する持てなし、生類に対する慈しみ、師 (や年長者) に対する奉仕精神、相応しい機根のひとへの布施をそなえ

---

<sup>13)</sup> ṣaṭ-karma-nirata-: Monier の Sanskrit-English Dictionary には、adhyayana (ヴェーダの学習)、adhyāpana (教授)、yajana (儀軌の実行)、yājana (儀軌の司祭)、dāna (布施)、pratigraha (享受) の 6 つ、および後代の文献に基づけば、snāna (沐浴)、saṃdhyājapa (朝夕の唱名)、brahma-yajña (ヴェーダの朗誦)、tarpaṇa (毎日神、祖霊、聖者に水を捧げること)、homa (護摩)、deva-pūjā (神への礼拝) の 6 者だという。ここでは時代的に後者だろう。

ていました。このように、臣民のあいだでは日々の営みがなされていたのです。そしてある時、王が獅子座に坐しました。すると、集会場には、どのようなたぐいの臣下の王子たちが着座したでしょうか。ある者たちは、称讃偈の詠み手たち (stuti-pāṭhaka-) に一連の讃歎詩 (viruda-) を詠わせました。ある者たちは横柄に自分の腕力を自ら称えました。ある者たちは、26種の、棍棒 (daṇḍa-) などの武器 (āyudha-) <sup>14)</sup>の手法に明るく、顎髭をたずさえた若者たちで、互いに笑っていました。ある者たちは、庇護を求めてやってきた者たちを守護することに懸命でした。ある者たちは、来世 (paratra-) のことが気がかりでした。ある者たちは、正義の集積の元となる者たちでありました。このような王子たちが、王に仕えていたのです。そこにある獵師がやってきて王に一礼し言いました。「王様！ 森の中に、アンジャナ山ほどの大きさの、ある猪 (varāha-) がやって来ています。王様、お出でになってそれをご覧ください。」彼の言葉を聞いて、王はそこにいた王子たちと一緒に森へ行きました。川岸にある茂みの中にいる猪を見ました。すると、その猪は、勇士たちの騒ぐ声を聞いて、その茂みから出てきました。すぐに、王子たちは誰もが皆、「私が、私が」と自己主張して、自分の手の巧みなことを示しつつ、26の武器をそいつのうえに投げかけました。その猪は、それらの武器を意に介さず、王子たち皆から逃れ、山の中にある洞窟 (kandara-) のなかに入りました。一方、王は、そいつの跡をつけて山に至りました。その山で、ある洞窟 (bila-) の入り口を見つけ、自ら洞窟の入り口に入ると、真っ暗闇の中をどのくらい中まで行ったのでしょうか。そこでは、前方に、非常に明るい灯明がありました。そこからいくらか離れたところに、防壁が黄金 (suvarṇa-maya-prākāra-) で出来ていて、白雲にとどく程の高楼 (śubhrābhraṃ-liha-prasāda-) できらびやかにされ、神殿や庭園 (devatālayopavana-) などで飾られ、あらゆる物資に満ちた市 (vipaṇi-) で賑わい、裕福な人々 (dhanika-loka-) に満ち、さまざまな艶めかしい女性たち (vilāsinījana-) に傳かれて、非常に魅惑的な街 (atimanoharam)

---

<sup>14)</sup> ここで言う 26 種類の武器とは具体的に何をさしているのか未詳だが、この作品より 1000 年以上遡る『アルタ・シャーストラ (Artha-śāstra)』第 2 巻第 18 章「武器庫長官」の項目には、固定する兵器 10 種、移動兵器 16 種、鎗の類 11 種、弓 3 種、矢 5 種、剣 3 種、斧類 7 種、等が列挙されている。[上村勝彦 1984:169-170]

nagaram)を見ました。そこに入り込み、市の中に行こうとすると、たいそう魅惑的な日輪のような王宮(atimanoharam dinakara-maṇḍala-saḍṛśaṃ rājabhavanam)が見えました。そこは、ヴィローチャナ(Viocana)の息子バリ(Bali)<sup>15)</sup>が国を治めておりました。(ヴィクラマ)王が王宮に入ると、獅子座に腰掛けていたバリによって即座に近寄られ抱擁されて、この上なく美しい獅子座に坐るようながされ、訊ねられました。「ご主人様、あなた様はどうしてやって来たのですか？」ヴィクラマ王が言いました。「私は、あなたにお会いするためにやって来たのです。」バリが言いました。「私は嬉しく思います。今や私の一族は清浄になり、繁栄も結実しました。なんとになれば、高潔なるあなた様に、私どもの館にお出で頂いたのだから。

1. いまや、長い年月ののち、この私の家は、賞賛に値するものとなりました。あなた様のおみ足という蓮華に触れる幸福を得て。」

ヴィクラマ王が言いました。「王よ！あなたは清らかなる心の持ち主ですね。あなたの生まれは賞賛に値します。ヴァイクンタの首飾りのようなナーラーヤナが申し出に応じて直々にあなたの家にお出でになったのでしょうから。吾輩のようなものが何でありましょう。」バリが言いました。「ご主人さま、お出でになられたのはどうしてですか？」ヴィクラマが言いました。「ダーナヴァの筆頭の者よ、私はあなたに会うためだけでやって来ました。他に理由はありません。」バリが言いました。「もしご主人様が私に友情を感じて下さって来られたのなら、お願いですから、何らかのものを乞うていただきたいのですが。」ヴィクラマが言いました。「私には何の不自由はありません。私のほうこそ、あなたのお陰で、あらゆる物資に満ち足りております。」バリが言いました。「ご主人様、あなた様にご不足があるなどとは私が申しましたでしょうか？友情を取りたてて申し上げたのです。ですから、友情のしるしとして、そのように申し上げたのです。こう言わ

---

<sup>15)</sup> バリは、『ヴァーユ・プラーナ (Vāyu-purāṇa)』(成立年代 AD4-5C. [Rocher: 245]) に7層あると説かれる地下世界(すなわち Pātāla 界)の最下層に住む悪魔(ダイティヤ)とされる。ちなみに各層に住むダイティヤと龍神の名が次のとおり示されているという。第1層:ナムチ、カーリヤ、第2層:ハヤグリーヴァ、タクシャ、第3層:プララーダ、ヘマカ、第4層:カラネミ、ヴァイデーヤ、第5層:ヒランヤクシャ、キルミラ、第6層:プロマン、ヴァースキ。[定方 2011:63]

れております。

2. 与え、受け取り、秘密を語り、尋ね、楽しみ、楽しませる、これら六種が、友愛のしるしなり。

3. 奉仕なくして、友愛はどうやって誰に知ってもらえようか。何となれば、神々も、乞われるものを授与することによって、大願成就を授けるものとなるのです。 また、

4. 布施が与えられるかぎり、世間には友愛が存在す。子牛 (vatsa-) は、乳が絶えたのを見て、自ら母親を捨てるなり。

それにまた、

5. 分別をもたない獣にとってすら、我が子からの布施も決まってもっとも嬉しいものなのだ。ご覧なさい。雌の水牛は、(乳をのませるべき) 子牛を伴っていながら、バターミルクが与えられさえすれば、必ず、ずっと乳を (こちらに) くれるのだ。」

このように言ってバリは、ヴィクラマ王にラサ (rasa-) とラサーヤナ (rasāyana-) を与えました。すると王は、そこを辞して、洞窟から出、馬に乗って、大通りをやって来ると、大層みすぼらしく、貧困に打ちひしがれた、ある年老いたバラモンが息子と共にやって来て、多くの賛辞を唱えて言いました。「旦那さま (施主様 : yajamāna-) ! 私は極度の貧困に打ちひしがれた、大家族をもつバラモンです。いまや、家族共々私には、食べるものが何もありません。お金を恵んで下さい。腹が減って仕方ありません。」王が言いました。「バラモンよ。今、私の手許にはお金はありませんが、ラサとラサーヤナというふたつの物があります。このラサと混ぜれば、七つの鉱物が黄金になります。このラサーヤナを用いる者は、老いと死を逃れたものとなるでしょう。この二つのうちのどちらか一方を受け取りなさい。」すると、父親が言いました。「老いと死を逃れたものとなることのできるラサーヤナを下さい。」息子が言いました。「そんなラサーヤナで何になるというのですか? 老いや死を離れても、なお、貧困を甘んじなければなりません。鉱物との接触によって黄金が生じるところのラサを下さい。」と、両者の間に喧嘩が始まってしまいました。すると王は、ふたりの喧嘩を聞いて、ラサとラサーヤナの両方を与えました。そして二人は王を称えて、自分の庵に帰りました。王も、ウツジャイニーに戻りました。

この話しを語り終わって、人形は王に言った。「王様、あなたにこのよう

な寛大さがあるなら、この獅子座にお座り下さい。」王は黙ってしまった。

### III-7 現代に伝わる民話から

西暦の八月上旬、雨期のただ中に催されるナーグ・パンチャミー（蛇供養祭）には、様々な因縁譚<sup>16)</sup>が語られるようだが、ラージャスターン地方に伝わるヒンディー語の民話にも以下のような話があり、美しい蛇の住まいが語られる。

「商人の末の嫁」商人の7人息子の嫁たちのうち一番下の嫁は、蛇神様祭りの里帰りにも、実家から迎えに来てくれる者が誰もいないとわかっていて。ある日、7人の嫁たちが牛糞を取りに行ったとき蛇に出くわし、上の6人が蛇をぶつのを末の嫁が制止した。祭りの日、その蛇が末の嫁を迎えに来て、自分の住み処である穴につれて行った。そこには美しい街、宮殿、庭園があった。何日も過ごした後、お土産を沢山もらってかえると、上の嫁たちが妬んで、蛇のいるところへ用事をいいつけた。そのたびに蛇から踝飾りや首飾りをもらってきた。そのことをお妃様に言いつけられ、その首飾りを召し出す。だが、お妃様が首に掛けると、蛇に変わってしまった。子細を知って、お妃様は、蛇神様のご供養をするようお触れをだした。[坂田]

## IV. 極楽と龍宮：理想郷：黄金の輝き

前章にて、時代を追いながら諸文献から、地下もしくは海底にある、とりわけナーガの住む世界が、あたかも極楽浄土と見紛うばかりに描かれている箇所をひろって見た。(それぞれの描写に用いられている語彙を逐一照合すれば、異同も明確にすることができるだろうが、それは他の機会としたい。)

極楽を想起した浄土思想は、西紀100年頃クシャーナ王朝下の北西インドで芽生えたとされる[藤田2007:7]。浄土思想の発想者たちが、地下に理想郷を想定した人々と夫々文化伝統を共有していたの

---

<sup>16)</sup> [Caturtī:78-81] には、『スカンダ・プラーナ』にある因縁譚を要約紹介されている。

か否かについては慎重な判断を要するが、時間だけで見れば、地下の黄金世界が先行していた。

バビロニアでは紀元前 1500 年頃には既に金の精錬・合金方法が知られていた[立川:97]ことから類推すれば、『リグ・ヴェーダ』(X,121)にでる「黄金の胎児 (hiraṇya-garbha-)」讃歌<sup>17)</sup>の表現も、インドでもこの時代に精錬金が知られていた [cf.辻 1967:16] 証左と見ることが出来るかもしれない。精錬金の使用に先んじた山金、砂金などの自然金の使用時代[立川:20]がインドにあったかはともかくとして、鉱物資源という感覚からすれば、地下世界に黄金の国があるという発想は至極道理だ。クシャーナ朝時代(西紀 50 年頃～250 年頃)に、それまでは銅貨のみだった貨幣に、インドで初めて金貨が鑄造されたり [グプタ:30]、様々な金製の装飾具<sup>18)</sup>が製造されたりした [宮治:64] 環境は、黄金世界を地下より引き上げて西方の彼方ではあっても地上に想定させる、つまり浄土思想がおこった要因に見えなくもない。

ヒンドゥーたちが描いたメール山も黄金の山であったように、黄金は理想郷の必須アイテムであったが、その他にも美と安楽のアイテムが共通して見られる事実から、極楽と龍宮とは、先後関係はともかくとして、同一の文化的土壌から発した二様の表象であるということと言えるだろう。

## V. 理想郷：不老不死

漢訳仏典には「須弥山」という名でしばしばお目にかかるメール(Meru)山は、ヒンドゥーおよびジャイナの宇宙観でも、世界の中央にある大陸ジャンブ・ドゥヴィーパ (Jambu-dvīpa) の中心に聳えているとされる [定方 2011:50-56, 366-367]。『マハーバーラタ』(第 6 巻第 7-9 章) [上村 2002:VI,34-44] では、メール山の傍らにジャンブ・

---

<sup>17)</sup> 『リグ・ヴェーダ』に見られる、金、銀、銅などの金属については、[Banerjee] が詳しい。

<sup>18)</sup> BC1000～100 年インド中央部および南部の巨石文化の担い手たち (ドラヴィダ人という説が有力) も金細工の創作に長けていたという。[ターパル:151]

ドゥヴィーパを初めとする4つの大陸があり、それぞれ楽園の様相をなしている。例えば、そのうちの一つ、福德をなした人および成就者シッダ (siddha-) <sup>19)</sup>らが住むウッタラ・クル (Uttara Kuru) は、甘い果実、香しい花、宝玉ででき砂金に満ちた土地、等々から、極楽の観念との関わりが指摘されるどころ<sup>20)</sup>であるが、いまは、次の一点にのみ焦点を絞りたい。ウッタラ・クルでは、人々が無病で憂いなく、1万1千年生きる、ということだ [Hopkins: 186]。

長寿、あるいは不老不死となり得ることも、理想郷・楽園の要素の一つであったのだ。先に見た『ジャータカ』543では、無病、安楽、家畜も子供に恵まれるという摩尼珠が龍から授けられたし、『屍鬼二十五話』第7話にも、不老不死となる果実が海中都市に存在した。

龍踊りなどにも付き物の宝珠マニ (maṇi) (摩尼宝珠) は、『リグ・ヴェーダ』にすでに二度言及され、蛇形の悪魔ヴリトラ (Vṛtra) が黄金のマニで着飾っている (RV.I,33,8) という [長柄:2]。ヴェーダ文献を中心にマニに関して精査された長柄行光先生によれば、『アタルヴァ・ヴェーダ』には100回以上マニという単語が現れ、痛風などの激痛や痙攣などに効能のある jaṅgīḍa という樹木等々から作られた、長寿を祈る護符としての目的をもつとし、「天に生まれ、海に生まれ、河よりもたらされし、かの黄金より生ぜし貝は、我らにとりて命長らえさせる maṇi なり」 (AV,4,10) という真珠貝のマニを詠った詩節を紹介している [長柄:3-9] [Ray:37]。黄金でできた (svarna-maya-) マニなど、様々な素材や、紐を通す穴があったことなども、諸文献からの情報として紹介され、その呪力ゆえに儀礼と関わっていたものが、時代を経るにしたがって宝石・宝珠類を指すようになったと指摘されている [長柄:10-15]。

プラーナ文献やカーヴィヤ作品および占術書 (『ブリハット・サンヒター (Bṛhat-saṃhitā)』) を主たる資料として、装飾品としての真

---

<sup>19)</sup> タントラ系の苦行を修して超能力を備えた者のことだが、錬金術師という意味合いで用いられることもある。シッダたちの錬金術について詳細な研究が [White1996] である。

<sup>20)</sup> 極楽の起源をめぐる諸説については、この北クル説を含めて [藤田 1970:486-505, 藤田 2007:368-399] に詳しい。また、注1) も参照されたい。



珠 (muktā-phala) について整然と示してくださった原實先生も、蛇の頭上の真珠は、とりわけ優れて、毒を斥け、熱を鎮め、不吉を払い、適を減ぼし、名声を博し、勝利をえるものとされたことを紹介している [原 1966b:167-168]。

また、『法華経』「提婆達多品」の龍女成仏譚のなかで、龍女が釈尊に捧げる宝珠 (マニ) は、陰核ないし性的快樂の象徴とする戸田裕久氏の解釈 [戸田] <sup>21)</sup> も、生命力というキーワードに括れば、今見ているマニの脈絡から逸脱しているとは言えないだろう。

龍宮の主である龍は、マニなる長寿を約束する宝を有していた。

人間にとって理想郷は、莊嚴であるばかりでなく、長寿にも与れるところであって欲しかったのである。その両者が端的に示されているのが、先に紹介した『獅子座三十二話』の第 19 話である。地下世界の主バリからヴィク라마王がいただいたのは、卑金属から黄金を生み出すラサ (rasa-) と不老不死となることのできるラサーヤナ (rasāyana-) であった。これは、とりもなおさず、錬金術と長生術の融合を示している。

## VI. 錬金術と長生術：ラサとラサーヤナ

いわゆる錬金術は神話的には古代エジプトの神 Thoth (ギリシャ語で Hermes) に起源するとされる一方、不死の靈薬を求める術は中国でおこり、それぞれ独自に発展しながら、イスラム興起以降に、双方の情報交換がなされるようになったという [Rāy:4-5]。

周知のとおりインドにはヴェーダ祭式に用いられるソーマ (soma-) [ワッソン] や、それと同義とされることもある [辻 1967:67] が叙事詩作品において神々が飲む甘露アマリタ (amṛta-) <sup>22)</sup> [上村 1977]

---

<sup>21)</sup> 龍が持つマニについて最初に注意を促してくださったのは、2013年1月9日単発の講義で伺った国際仏教学大学院大学の藤井教公先生であり、同年9月28日東京大学印度哲学印度文学同窓会主催の研究例会での発表のあと、戸田氏の論考についての情報を提供してくださったのも同先生である。この場を借りて、藤井教公先生に御礼申し上げたい。

<sup>22)</sup> 7世紀前半のカーヴィヤ詩人でもあったハルシャ王 (Harṣa) による戯曲

[Gonda] も、長寿や不死を齎すものとして存在した。ここでは、そうした神話的もしくは儀礼的な具材については触れない。

人間が摂取して不死となることができる薬ラサーヤナと、卑金属を貴金属に変ずることのできる液体ラサとの関係は、『獅子座三十二話』第 19 話と同時期か少し後の、1350 年頃、南インドの哲学者マーダヴァ (Mādhava) によって著された『全哲学綱要 (Sarva-darśana-saṃgraha)』の「水銀派 (raseśvara-darśana)」という項目の中で明確に示されている。

また水銀の教義は錬金術のためのみのものであると考えるはならない。何となれば、身体の変化によって解脱を得ることこそ最高の目的なのであるから、それ故に『水銀の海 (Rasārṇava)』<sup>23)</sup>の中にいわく、

---

『ナーガの歓喜 (Nāgānanda)』第 6 幕第 32 偈 [Śāstrī G:291] には、ナーガ (蛇族) を救済するため自ら犠牲となったジームータヴァーハナ王子を生き返らせようと、改心したガルダ鳥 (Garuḍa:金翅鳥) がインドラ神よりアムリタを攫って撒こうとする場面がある。ガルダとナーガ (蛇) の確執およびアムリタをめぐる蛇の舌先が割れた経緯などについては [原 1966a:430-431] に要領よく紹介されている。

<sup>23)</sup> 錬金術に関する論書 (rasa-śāstra) の一つだが、タントラの担い手たちによる書物とされる。第 1 章については英訳あり [White1998]。参考までに、判明している錬金術書を挙げておく。

*Rasa-ratnākara* by Nityanātha (*Rasārṇava* の言及あり)

*Rasendra-cintāmaṇi* by Rāmacandra (*Rasārṇava* の言及あり)( or by Somadeva (12-13c.) [ルヌー])

*Rasādhyāya* への注釈書 by Meruṭuṅga (1386 年ジャイナ)

*Rasa-ratna-samuccaya* by a son of Siṃhagupta or Nityanātha or Aśvanīkumāra [以上ヴィンテルニッツ: 200-201]

*Rasa-prakaśa-sudhākara* & *Rasa-kalpa* by Yaśodhara

*Rasa-siddhi-śāstra* by Vyādhipāda 13 世紀チベット語訳 現存なし

*Rasa-rāja-lakṣmī* by Viṣṇudeva <以下 14 世紀の書>

*Rasa-nakṣatra-mālikā* by Matanasimha

*Rasendra-cintāmaṇi* by Dundukanātha

*Rasa-sāra* by Govindācārya

*Rasendra-sāra-saṃgraha* by Gopālakṛṣṇa

*Rasendra-kalpa-dhṛuma* by Rāmakṛṣṇabhata

*Dhātu-ratna-mālā* by Devadatta

*Rasopaniśad* <年代不明>, *Rasa-jala-niddhi* by Bhūdev Mukarji <現代 1927 年> [以上ルヌー]

神よ。汝がそのために金属の変化を説いたところの、その身体の変化を説明せよ。—それによって空をとぶこともできる<sup>24)</sup>のであろうが。

あたかも金属におけるがごとく同様に身体に関しても<sup>25)</sup>常に水銀が用いられねばならぬ。女神よ。身体と金属とのうちに入って等しく働きをなす。

まず金属に関して観察すべし。のちに身体に関して適用すべし。』と。」

[中村 1973-4:20-21]

引用文献の成立年代が未詳だが、大きく遡らないとすれば、ラサとラサーヤナは、遅くとも13-14世紀には融合していたことになる。夫々の前史あらましを調べてみよう。

## VI-1 ラサ：卑金属を貴金属に変える液体

紀元前2世紀から後2世紀のあいだに成立したと見られる帝王学書、カウティリヤ (Kautilya) の『実利論 (Artha-śāstra)』には、第2巻・第13章に (第31項目—貴金属庁における黄金長官) という項目があり、

「・・・ジャンブー河から採れるもの、・・・天然の純金として生じたもの、  
[金製造] 液 (ラサ) により [黄金に] 変えられたもの、鉱山から生ずるもの。以上が金の [種類で] ある。」 [上村 1984:146] [佐藤,1989:8]

とある。

『マハーバーラタ』(XII, 271章) には、ラサという語ではないが、魂が行為によって5色 (黒 *kṛṣṇa*→緑 *harita*→赤 *rohita*→暗青 *nīla*→黄色 *hāridra*-) (もしくは6色) に変化しながら輪廻するというレーシュヤー説があり、この説は、もとジャイナ教から発しアジーヴィカ教を通って叙事詩に至ったとのことだが、主要6種の金属の色と

---

24) ウッタラ・クラの住人といわれたり (注1) 参照)、伝説的説話集『ブリハット・カタール (*Bṛhat-kathā*)』のキャラクターであり [柴崎]、カーヴィヤ作品にも登場する (注22) 参照) 半神半人のヴィディヤダラは、神通力を得て空中の飛翔が可能だとされる [原 1966a:431]。その始原を紀元前2世紀まで遡り得、ジャータカ、『ミリンダ王の問い』『マハーヴァストゥ』に言及され、バルフートの浮彫りにも見られるという [同]。

25) ‘yathā lohe tathā dehe’ [White 1984:5]

対応することから、西方からもたらされた冶金術との関係が指摘されている [Tokunaga2005]。

漢訳仏典から得られる情報として、鳩摩羅什 (344-413) 訳『大智度論』のなかに、

薬物と呪文によって青銅を金に変えることができる。薬物の巧妙な使用によって、銀は金に、金は銀に編成しうる。精神力によって人は粘土や石を金に変化することができる。[エリアーテ 1973:160, 1975:126] [Waley:1102-1103]

とあり、また、少々時代がくだって、実叉難陀 (Śikṣānanda 652-710) 訳『大方広仏華嚴経 (Avataṃsaka-sūtra)』(八十華嚴)には、

ハタカなる薬液がある。この溶液一両 (リヤ) は千両の青銅を純金に変形することが出来る [エリアーテ 1973:160, 1975:126] [Waley:1102-1103]

との記述があるという。

西紀 1306 年に完成したという [ヴィンテルニッツ 1976:130-131] ジャイナ教のメールトゥンガ (Merutuṅga) による逸話集『プラバンダ・チンターマニ (Prabandha-cintāmaṇi)』には、あのヘーマチャンドラ (Hemacandra) が、師であるデーヴァチャンドラ (Devacandra) に向かって発した言として、

私が少年だった頃、或る蔓の樹液と混ぜ合わせた一塊の銅を、・・・あなたの教えに従って火にかけたところ、それは金になった。[Tawney:147] [エリアーテ 1975:123-124]

という。

タントラ文献には、錬金術に関する記述が豊富にできるが、例えば、ハタ・ヨーガに属するとされるので 13 世紀以降のテクストだろうが、『シヴァ・サンヒター (Śiva-saṃhitā)』(III,54) には、

ヨーガ行者はどのような金属からでも、それを自分自身の大便秘および小便とともに擦ることによって、金を作り出すことができる。[エリアーテ 1975:128]

という。

## VI-2 ラサーヤナ：不老不死の霊薬

『マハーバーラタ』(XII, 307) に次のような偈がある。

(yudhiṣṭhira uvāca)

aiśvaryaṃ vā mahat prāpya dhanam vā bharatarṣabha /

dīrgham āyur avāpyātha katham mṛtyum atikramet //1//

tapasā vā sumahatā karmaṇā vā śrutena vā /

rasāyana-prayogair vā kair nopaiti jarāntakau //2// [Bhatt] [山野 2004: 65]

(1) 偉大なる自在力および財を得て、バラタ族の雄 (= ビーシュマ) よ、[さらに] 長寿を獲得して、どうやって死を克服することができるのですか？ (2) 苦行によって、甚だ偉大な行為によって、あるいはシュルティ (天啓書) によって、はたまたどのラサーヤナの使用によって、老と死に赴かないのですか？

医学書のうち、2世紀頃成立したといわれる『チャラカ・サンヒター (*Caraka-saṃhitā*)』では、インド古典医学8科の最後が強精法 (*vājīkaraṇa-*) と長生法 (*rasāyana-*) であるとし、第6巻『治療編』の第26章、第27—30章(最終章)がそれぞれ扱っている [矢野 1988: 54-55]。インド医学 (*āyur-veda-*) では、ラサーヤナ (*rasāyana-*) とは、「ラサの保持、操作」のこと、すなわち長生法であるとする。ラサ (*rasa-*) は、ここでは7つの生命組織 (*vital tissues*: *rasa-* (リンパ液)、*rakta-* (血)、*māmsa-* (筋肉)、*meda-* (脂肪膜)、*aṣṭi-* (骨)、*majja-* (骨髄)、*śukra-* (生殖要素)) のことを指し、それら通り道もしくは管がアヤナ (*ayana-*) と呼ばれるもので、11種類のラサーヤナが免疫療法として数え上げられるそうだ。 [Mungantivar:67]

### VI-3 ラサとラサーヤナ

以上見てきたところから、ラサとラサーヤナは、それぞれ錬金術と長生術という概念で、出典自体の年代が不確実ではあるものの、大凡西暦2世紀頃には存在していたと思われる。

錬金術師たちの実験室 (*rasa-śālā-*) の存在などを根拠に、近代になってから、*rasāyana-* が *rasa-vidyā-* (錬金術) と同値されるようになったという見方もあるが [Raisuddin:85]、両者が13-14世紀ころに融合していたのは、『獅子座三十二話』『全哲学綱要』の記述から確かなので、それがどこまで遡れるのか明らめたいところだ。

『大唐西域記』(巻十、12 憍薩羅国・4) [水谷:324-328] 『カター・

サリット・サーガラ』第7 lambaka, 通章第 41 章「チラーユス王と宰相ナーガールジュナ」[Śāstrī J:188-189] [Penzer:252-256] [岩本 1964:32-35,45-47] や 11 世紀前半にインド誌を記したペルシア人哲学・科学者アル・ビールーニー<sup>26)</sup> [Sachau:I,187-189] [ルヌー: 435] [ヴィンテルニッツ 1973: 200] に言及される錬金術師としてのナーガールジュナ (Nāgārjuna) は、長寿の薬術に長けていて且つ卑金属から黄金を生み出す術も披露した [山野 2004] から、文献上で確認できるラサとラサーヤナの融合は、7 世紀頃まで遡らせることができる。

## VII. おわりに

錬金術にこだわったのは、ユングに啓発されたわけではないが、「人間の心の本質」[ユング:13]にかかわるような予感が無意識のうちに働いていたのかもしれない。

本稿では、人間が希求する理想の世界として、同じ夢から極楽と龍宮が発想されたのではないかと指摘したのち、その理想郷には黄金に象徴される美しく心地よい環境だけではなく、永遠の命も思い描いていたことを龍が携えるマニ宝珠を通して垣間見た。

その「黄金」と「永遠の命」は、錬金術（ラサ）と長生術（ラサーヤナ）に対応することを 13 世紀の説話に見いだしたことを契機に、ラサとラサーヤナの前史をたどり、両者の融合がタントリズムの萌

---

<sup>26)</sup> アル・ビールーニーは、人間が黄金に変わってしまう話を紹介している

[Sachau:192] が、それをハッサンは kim-puruṣa-と関連付け、複合語の前分 kim-を中国語の「金」だとして、kim-puruṣa-を「金人」と解し、もって中国錬金術のインドへの影響を強調している [Hassan]。サンスクリットで kim-puruṣa-は一般に疑問詞 kim-(what の意)と「人間」を含意する puruṣa-の複合語で ‘what sort of man’の意から「混血種族」を意味し、ヒンドゥー世界観では人間の住むバーラタ国のすぐ北にある楽園がキンプルシャの国とされる [定方 2011:53-55]。後代、kim-puruṣa-は同じく「人間」の意の単語 nara-との複合語 kim-nara-と同義とされたようだが、仏教に入ったキンナラ（緊那羅）は半人半馬もしくは人面鳥をさし、『阿弥陀経』において美声で啼く鳥、迦陵頻伽と同一だと見られている [定方 1979]。また、ヒマーチャル・プラデーシュ州に住みチベット・ビルマ語派の言語を使用する民族キンナラについては [Sharma] を参照されたい。

芽と同調する7世紀頃まで遡れることを確認した。それ以前には、ラサとラサーヤナは個別に存在していたものの、融合したものとしての形跡は窺えなかった。だが、「黄金」と「永遠の命」という二つの願望に夫々包含させてみれば、龍宮とマニ宝珠とに表象されて、ジャータカの時代から、両者は一体として希求されていたと言えるのである。

さて改めて、理想郷を荘嚴たらしめている最も主要な要素、黄金を注視すれば、故地のシュメール語で *guškin*、*azaggi*、アッカド語で *ḥurasu*、*sârîru*、*šaššu*、いずれも「光り輝くもの」という意味だという [立川:95]。サンスクリット語で黄金を指す *suvarṇa-*、*hiraṇya-* は、順次「美しい色を持つもの」「黄色いもの」の語義だが、*kanaka-* は「光り輝くもの」である。黄金の国は、すなわち光の国なのだ。理想郷は光溢れ、齡永劫にもたらしてくれる。

そこで、本稿の初めに提示した『阿弥陀経』をふりかえってみたい。極楽におわす阿弥陀仏の原語は、*amitābha-* (測りきれない (*amita-*) 光 (*ābhā-*) を有するもの = 無量光仏) と *amitāyus-* (測りきれない (*amita-*) 寿命 (*āyus-*) を有するもの = 無量寿仏) である。本邦の浄土教研究の泰斗、藤田宏達先生は両者の起源を別個に原始仏教の仏陀観のなかに求め [藤田 2007:249-255]、辛嶋静志氏は諸ヴァージョンの阿弥陀経・無量寿経類テキストを精査し、ガンダーラ語の音韻に着目して、*amitābha-* が元来の名前で *amitāyus-* は後に前者から変容する形で生まれたという見解を示している [辛嶋:28-33]。

先達の精緻な文献学的研究の成果は尊重こそすれ些かも揺るがそうとするものではないが、本稿でこれまで辿ってきたインドの諸文献から総合的に判断されるところは、理想郷を描いた夢の中では、無量の光に満ちた空間と無量の寿命という時間とが一体となって同居していたということだ。*amitābha-* と *amitāyus-* が同時に思念されても何ら不思議ではないという見解である。テキストで跡づけられる言語としての表現に時間差があったとしても、イメージーションの際には、空間的観念と時間的観念が同時におこるのはあり得ること

だ。必然とは言えないが、自然ではある。

点として残存する数多のテキストを、可能な限り縦横多次元的に関連づけて観察することによって、点と点を結びつけている眼に見えなかった糸が朧げながらも浮かんでくる。それこそが彼らの生き様としての文化の、一つの面影なのではないだろうか。

#### <参考文献>

- Banerjee, Manindra Nath, 1927, “On Metals and Metallurgy in Ancient India”, *The Indian Historical Quarterly*, Vol. 3, No. 1, pp. 121-133, No.3, pp. 793-802.
- Bhatt, Govind Hargovind, 1960, “The raseśvara system in the Mahābhārata”, *Journal of Oriental Institute, Baroda*, vol.9,pt.4, pp.422-423.
- Bhattacharya, Ramkrishna, 2000, “Uttarakuru: The (E)utopia of Ancient India”, *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute*, Vol. 81, pp.191-201.
- Brockington, John, 1998, *The Sanskrit Epics*, Handbuch der Orientalistik, Leiden; Brill.
- Caturvedī, Puruṣottamaśarmā, 1988 (3<sup>rd</sup> ed.), *Bhāratīya Vratotsava (in Hindī), Vārāṇasī; Caukhambā Vidyābhavana*, pp.78-81.
- Clark, T. W., 1955, “Evolution of Hinduism in Medieval Bengali Literature: Śiva, Caṇḍī, Manasā”, *BSOAS*, Vol. 17, No. 3, pp.503-518.
- Cowell, E. B. and F. W. Thomas, tr., 1968, *The Harṣa-carita of Bāṇa*, Delhi: Motilal Banarsidass.
- Cozad, Laurie, 2004, *Sacred Snakes, Orthodox Images of Indian Snake Worship*, Aurora, USA; The Davies Group.
- Edgerton, Franklin, 1993 rpt (1st. 1926 at Cambridge), *Vikrama's Adventures or the Thirty-two Tales of the Throne*, 2vols, (Harvard Oriental Series) , Delhi; Motilal Banarsidass
- Fausbøll, V. ed., 1963, *Tha Jātaka, together with Commentary*, vo.2-5, London; PTS,
- Fergusson James, 1865, *Tree and Serpent Worship: Illustrations of Mythology and Art in India in the first and fourth Centuries after Christ*, London; India Museum. (rpt)
- Gonda, J., 1997 (1<sup>st</sup> ed. 1965), “Soma, Amṛta and the Moon”, *Change and Continuity in Indian Religion*, New Delhi; Munshiram Manoharlal, pp.38-70.
- Handa, O.C., 2004, *Naga Cults and Traditions in the Western Himalaya*, New Delhi; Indus Publ. com.
- Hassan S. Mahdi, 1977, “Alberuni's Legend of Golden Man and its Variants as Traceable to Chinese Alchemy”, *Sindhological Studies*, Summer 1977,



- pp.25-31.
- Hillebrant, Alfred, 1981, *Vedic Mythology*, tr. from German by Sreeramula Rajeswara Sarma, vol. 2, Delhi; Motilal Banarsidass
- Hopkins, E Washburn, 1974, rpt. (1st ed. 1915 in Strassburg), *Epic Mythology*, Delhi; Motilal Banarsidass.
- Ingersoll, Ernest, 2007 (1 st. 1982), *Dragon and Dragon Lore, A Worldwide Study of Dragon in History, Art and Legend*, Lexington; Forgotten Books
- Kane, P. V., ed., 1965 (1<sup>st</sup> ed. 1918), *The Harshacarita of Banabhatta, Text of Uchchhvasaa I-VIII*, Delhi; Motilal Banarsidass Publ..
- Keith, A. Berriedale, 1993 (1<sup>st</sup> ed.n.d.), *A History of Indian Literature*, Delhi; Motilal Banarsidass publ..
- Mani, Vettam, 1975, *Purāṇic Encyclopaedia, A Comprehensive Work with Special Reference to the Epic and Purāṇic Literature*, Delhi; Motilal Banarsidass
- Mishra, Lokesh Chandra, ed., 2004, *Scientific Basis for Ayurvedic Therapies*, Boca Raton; CRC Press.
- Mungantiwar, Ashish A. & Ashish S.Phadke, 2004, “Immunomodulation: Therapeutic Strategy through Ayurveda” in [Mishra, 2004], pp.63-81.
- Panda, Sadhu Charan, *Nāga Cults in Orissa*, Delhi; B.R.Publ. Corporation.
- Penzer, N.M. ed., 2001 rpt., *The Ocean of Story, being C.H.Tawney's Translation of Somadeva's Kathā Sarit Sāga*, vol.III, New Delhi; B. R. Publ. Corporation.
- Raghuvira, ed., 1937, *Jaiminiya Brāhmaṇa of the Sāma Veda*, Book 1, Lahore; International Academy of Indian Culture. a PDF version in Web <<http://archive.org/details/jaiminiyabrahman014906mbp>> (13 Sep., 2013)
- Raisuddin, Sheikh, 2004, “Ayurvedic Bhasmas”, in [Mishra, 2004], pp.83-100.
- Ray, Acharya Prafulla Chandra, 2004(rpt., 1<sup>st</sup> ed. 1956), *Hinsotry of Chemistry in Ancient and Medieval India*, Krishnadas Ayurveda Series,100,Varanasi; Chowkhamb Krishnadas Academy.
- Rāy, Priyadarajan, 1967, “Origin and Tradition of Alchemy”, *Indian Journal of History of Science*, Vol.2, No.1, pp.1-21.
- Rocher, Rudo, 1986, *The Purāṇas (A History of Indian Literatures, Vol. II, Fasc. 3)*, Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Sachau Edward C., ed., 1983 rpt., *Alberni's India, An account of the Religion, Philosophy, Literature, Geography, Chronology, Astronomy, Customs, Laws and Astrology in India about AD1030*, New Delhi; Oriental Books Reprint co..
- Śāstrī, ganapati ed., 1917, *The Nāgānanda of Śrī Harṣa Deva with commentary Nāgānandavimarsinī by Śivarāma*, Trivandrum GGovernment Press.
- Śāstrī, Jagadīślāl, ed., 1988, *Kathāsarit-sāgara*, Delhi; Motilal Banarsidas.
- Sharma, B. R., “Kinnaras – A Wonderful Tribe in Western Himalaya”, Ashok Ranjan Basu & Satish Nijhawan ed., *Tribal Development Administration in India*, New Delhi; Mittal Publ., pp. 170-175.
- Snart, É, ed., 1977(rpt.), *Le Mahāvastu, texte sanscrit*, Meicho-Fukyū-kai.
- Tawney, C. H. tr. 1901, *The Prabandhacintāmaṇi or Wishing-stone of Narratives composed by Merutuṅga Ācārya*, Calcutta; Asiatic Society.

- Tanemura, Ryugen, 2014, “A Consideration of Momenta behind the Rise of Buddhist Tantrism”, Transactions of the International Conference of Eastern Studies(國際東方學者會議紀要), No. LVIII., the Toho Gakki, pp.90-91.
- Tokunaga, Muneo, 2005, “On the Origin of the Leśyās”, *The Journal of Philosophical Studies*, No.580, pp.1-11.
- Uther, Hnas-Jöng, 2004, *The Types of International Folktales, A Classification and Bibliography*, 3 vols, Helsinki; Akademia Scientiarum Fennica.
- Vālmīki Rāmāyaṇa, the Uttarakāṇḍa*, critical edition, 1975, Baroda: Oriental Institute
- Vaidya, P.L. ed., 1959, *Divyāvadāna*, Buddhist Sanskrit Texts, No.20, Darbhanga; the Mithila Institute.
- Vogel, J. Ph., 1995 (1st 1926 in London), *Indian Serpent-Lore or the Nāgas in Hindu Legend and Art*, New Delhi: Asian Educational Services.
- Waley, A., 1930, “Notes on Chinese Alchemy”, *BSOS*, vol.VI, pt.1, pp1-24, “References to Alchemy in Buddhist Scriptures”, *BSOS*, vol.VI, pt.4, pp.1102-1103.
- White, David Gordon, 1996, *The Alchemical Body : Siddha Traditions in Medieval India*, Chicago & London; The University of Chicago Press.
- White, David Gordon, 1998, “The Ocean of Mercury: An Eleventh-Century Alchemical Text”, Donald S. Lopez ed., *Religions of India in Practice*, New Delhi; Munshiram Manoharlal Publ. (1<sup>st</sup> ed. In Princeton University Press ,1995)
- Wilson, H. H., 1972, *The Viṣṇu Purāṇa, A System of Hindu Mythology and Tradition*, Calcutta; Punthi Pustak.
- Wilson, H. H., 1980, *The Viṣṇu Purāṇa, A System of Hindu Mythology and Tradition* (text in Devanagari, English translation notes and Apendices etc.), 2vols., Delhi; Nag Publ..
- Witzel, Michael, 2008, “Slaying the Dragon across Eurasia”, *In Hot Pursuit of Language in Prehistory, Essays in the four fields of anthropology in honor of Harold Crane Fleming*, ed. by John D. Bengtson, Amsterdam/Philadelphia; John Benjamins Publ. Com..
- Yamano, Chieko, 2008, “Nāgārjuna and Sātavāhana”, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, vol 56, No3, pp. (121)-(127).
- 赤沼智善 1958『漢巴四部四阿含互照録』破塵閣書房。
- 浅野祥子 1997「龍宮について—地獄との類似性」坂本要編『極楽の世界』北辰堂、579-588頁。
- 伊藤善之、古宇田亮修、松濤康雄 編 1999 “Transcribed Sanskrit Text of the Amoghapāśakalparāja, part II”, 『大正大学綜合佛教研究所年報』第21号、154-107頁。
- 岩本 裕 訳 1957『インド古典説話集 カター・サリット・サーガラ (2)』(岩波文庫・赤 66-2) 岩波書店。
- 岩本 裕 訳 1958『インド古典説話集 カター・サリット・サーガラ (3)』(岩波文庫・赤 66-3) 岩波書店。

- 岩本 裕 編 1964『サンスクリット読本』山喜房仏書林。
- 岩本 裕 1965『極楽と地獄—日本人の浄土思想』三一書房。
- 岩本 裕 1978『佛教説話研究・第三卷 仏教説話の伝承と信仰』開明書院。
- 岩本 裕 1979『佛教説話研究・第四卷 地獄めぐりの文学』開明書院。
- ヴィンテルニッツ著、中野義照訳 1966 『インドの純文学—インド文献史 第5巻一』日本印度学会。
- ヴィンテルニッツ著、中野義照訳 1976 『ジャイナ教文献—インド文献史 第4巻一』日本印度学会。
- ヴィンテルニッツ著、中野義照訳、1973『インドの学術書』日本印度学会。
- エリアーデ、ミルチャ著、1973『鍛冶師と錬金術師（エリアーデ著作集5）』せりか書房。
- エリアーデ、ミルチャ著、1975『ヨーガ2（エリアーデ著作集10）』せりか書房。
- 金子芳夫・小山一行・羽矢辰夫 1995『新国訳大蔵経 阿含部3』大蔵出版。
- 上村勝彦 1977「甘露」中村元編『仏教語源散策』東京書籍、95-97頁。
- 上村勝彦 訳 1978 『屍鬼二十五話』（東洋文庫323）平凡社。
- 上村勝彦 訳 1984 『カウティリヤ実利論（上）』、岩波書店。
- 上村勝彦 訳 2002 『原典訳 マハーバーラタ2、5、6』（ちくま学芸文庫）筑摩書房。
- 辛嶋静志 2010「阿弥陀浄土の原風景」『佛教大学総合研究紀要』第17号、15-44頁。
- 神野富一 2010 『補陀落信仰の研究』山喜房佛書林。
- 厨川文夫 訳 1941 『ベーオウルフ』（岩波文庫）岩波書店。
- グプタ、P. L. 著、山崎元一 他 訳 2001 『インド貨幣史—古代から現代まで—』刀水書房。
- 雲井昭善 1987「ナーガ（Nāga）考」『密教文化』第160号、13-34頁。
- ゴードン D.H.著、青江舜二郎訳、1972『先史時代のインド文化』紀伊国屋書店。
- 坂田貞二 2008「北インドの昔話における蛇の役割—若い嫁を授ける兄弟としての蛇、王子・王女の親としての蛇—」『人文・自然・人間科学研究』第20号（拓殖大学論集271）、拓殖大学人文科学研究所、5-29頁。
- 定方 晟 1971「仏典におけるナーガ」『印度学仏教学研究』第20巻、第1号、443-437頁。
- 定方 晟 1979「キンナラ」『東海大学紀要文学部』第32輯、31-43頁。
- 定方 晟 2011『インド宇宙論大全』春秋社。
- 佐藤 任、1983『密教と錬金術』勁草書房。
- 佐藤 任・小森田精子 訳著、1989『インド錬金術』東方出版。
- 柴崎麻穂 1998「Brhatkathā 起源譚と七人のヴィディヤーダラ転輪王」『南アジア研究』（日本南アジア学会）第10号、74-91頁。
- ジャ全： 中村 元 監修・補注 1982-1991 『ジャータカ全集』全10巻、春秋社。

- 杉山二郎 1984『極楽浄土の起源—祖型としてのターク・イ・ブスターン洞』筑摩書房。
- 立川昭二 1956『古代鉱業史研究』創元社。
- ターパル、B. K.著、小西正捷・小磯学訳 1990『インド考古学の新発見』雄山閣。
- 辻 直四郎 1967『インド文明の曙』（岩波新書、青版 619）岩波書店。
- 辻 直四郎 訳 1970『リグ・ヴェーダ讃歌』（岩波文庫、赤 60-1）岩波書店。
- 辻 直四郎 1973『サンスクリット文学史』（岩波全書、227）岩波書店。
- 辻 直四郎 1978『古代インドの説話—ブラーフマナ文献より—』春秋社。
- 辻 直四郎 訳、1979『アタルヴァ・ヴェーダ讃歌』（岩波文庫）岩波書店。
- 戸田裕久 2013「法華経提婆達多品龍女成佛譚の一解釈」『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集 法華仏教と関係諸文化の研究』山喜房佛書林、133-156 頁。
- 中村元・早島鏡正・紀野一義 訳注 1963-64『浄土三部経（上）（下）』全 2 冊（岩波文庫）岩波書店。
- 中村 元 訳、1973-4、「シヴァ教の説、水銀派の説、ヴァイシェーシカ説—マーダヴァ『全哲学綱要』第 7、第 8、第 9 章の翻訳—」『三康文化研究所年報』第 6・7 号、1-41 頁。
- 中村了昭 訳 2012『新訳・ラーマーヤナ 4』（東洋文庫 829）平凡社。
- 長柄行光 1986「*maṇi* について」『東洋の思想と宗教』第 3 号、早稲田大学東洋哲学会、1-18 頁。
- 根井 浄 2001 『補陀落渡海史』法蔵観。
- 原 實 訳・解説 1966a 「ナーガーナンダ」中村元編『仏典 I』筑摩書房、373-432 頁。
- 原 實 1966b 「真珠」『金倉博士古稀記念・印度学仏教学論集』平楽寺書店、167-182 頁。
- 平岡 聡 2001 「インド仏典に出没する龍（ナーガ）」『アジア遊学』No.28（〈特集〉ドラゴン・ナーガ・龍）勉誠出版、14-22 頁。
- 平岡 聡 2002 『説話の考古学—インド仏教説話に秘められた思想—』大蔵出版。
- 平岡 聡 訳 2007『ブッダが謎解く三世の物語 『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳 下』大蔵出版。
- 平岡 聡 訳 2010『ブッダの大いなる物語 梵文『マハーバストゥ』全訳上』大蔵出版。
- 藤田宏達 1970 『原始浄土思想の研究』岩波書店。
- 藤田宏達 2007『浄土三部経の研究』岩波書店。
- 藤田宏達 校訂 2011『梵文無量寿経・梵文阿弥陀経』法蔵館。
- フランシス・ハックスリー著、中野美代子訳 1982『龍とドラゴン—幻獣の図像学』（イメージの博物誌 13）、平凡社。
- 前田恵學 1959「インド仏教文学に現われた龍と龍宮」『東海仏教』第 5 輯、29-35 頁。
- 水谷真成 訳 1971『大唐西域記』（中国古典文学体系 22）平凡社。

- 水野善文 1996「バナールスの地名をめぐって—中世後期の或る修辞学書の諸写本比較研究の一環として—」『今西順吉教授還暦記念論集・インド思想と仏教文化』春秋社、758(191)-746(207)頁。
- 水野善文 2006「カーヴィヤ・シャーストラは単なる文学理論書か—色彩に関する表現をめぐって—」『南アジア言語文化』第4号、10-21頁。
- 水野善文 2013「『ハンサ・ドゥータ』解題」『東方』第28号、257-268頁。
- 南方熊楠 1971「田原藤太龍宮入りの譚」『南方熊楠全集1十二支考』平凡社、83-157頁。
- 宮坂宥勝 1971『仏教の起源』山喜房仏書林、350-375頁（第六章：初期仏教の文化的考察、第一節：非アリアン文化と仏教）＜初期仏典のナーガ神話について＞。
- 宮治 昭 2009『インド美術史』吉川弘文館。
- 矢野道雄、1988『インド医学概論（科学の名著、第Ⅱ期、1）』、朝日出版社。
- 山野智恵、2004「ナーガールジュナとラサーヤナ」『智山学報』第53輯（通巻67号）（『豊山教学大会紀要』第32号）、63（456） - 82（437）頁。
- 山野智恵 2008「シュリー山のナーガールジュナ」『蓮花寺佛教研究所紀要』第一号、224-202頁。
- 湯山 明 1966「マハーヴァスツ」水野弘元監修『新・仏典解題事典』春秋社、70-71頁。
- ユング、C. G. 著、池田紘一・鎌田道生訳 1976『心理学と錬金術 I, II』、全2巻、人文書院。
- ルヌー、L.・J.フィリオザ、山本智教訳、1979『インド学大辞典 第2巻 バラモン編』金花舎。
- ワッソン、R.G.・W.D.オフラハティ、徳永宗雄・藤井正人訳、1988、『聖なるキノコーソーマ』せりか書房。